

# 板付 13

—板付遺跡第 77 次調査報告—



調査略号：ITZ-77

調査番号：2211

2024

福岡市教育委員会

## 序

古くから大陸との文化交流の玄関口であった福岡市には、数多くの文化財が残されています。その中でも福岡平野は福岡の歴史を考える上で重要な遺跡が数多く残されています。これらの文化財を保護し、後世に伝えることは本市に課せられた責務であります。しかし、近年の著しい都市化により、その一部が失われつつあるのも事実です。福岡市ではそのような開発によってやむを得ず失われていく遺跡について事前に発掘調査を行い記録保存に努めています。

本書は、戸建住宅建設に伴う板付遺跡第77次発掘調査について報告するものです。この調査では、弥生時代中期から近世にかけての集落を確認することができました。これらは板付遺跡の解明のためにも重要な資料となるものです。今後、本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後に事業主様をはじめとする多くの関係者の方々には、発掘調査から報告書刊行に至るまで、ご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

令和6年3月22日  
福岡市教育委員会  
教育長 石橋 正信

## 例言

1. 本書は、福岡市博多区板付5丁目7-115における戸建住宅建設に先立ち、福岡市教育委員会が令和4年5月23日から令和4年6月24日にかけて発掘調査を実施した板付遺跡第77次発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は上記の主体により行われ、調査は福岡市埋蔵文化財課の山本晃平が担当した。
3. 報告する調査の基本情報は下表のとおりである。
4. 本書に掲載した遺構の実測図作成は山本が行った。
5. 本書に掲載した遺物の実測図作成は土器は山崎賀代子、木器は鶴来航介が行った。
6. 本書に掲載した遺構と遺物の写真撮影は山本が行った。
7. 本書に掲載した挿図の製図は山本が行った。
8. 本書で用いた方位は座標北である。
9. 本書で用いた座標は世界測地系による。
10. 調査で検出した遺構については通し番号を付している。
11. 本書に関わる記録・遺物等の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵保管され、活用されていく予定である。
12. 本書の執筆・編集は山本が行った。

### 板付遺跡第77次発掘調査基本情報

遺跡名	板付遺跡	調査回数	第77次	遺跡略号	ITZ-77
調査番号	2211	分布地図幅名	24	遺跡登録番号	0094
申請地面積	381.54㎡	調査対象面積	93.77㎡	調査面積	99.9㎡
調査期間	令和4年5月23日～令和4年6月24日			事前審査番号	2021-2-1235
調査地	福岡市博多区板付5丁目7-115				

## 本文目次

第1章	はじめに	1
1	調査に至る経緯	1
2	調査の組織	1
3	遺跡の位置と環境	1
第2章	調査の記録	5
1	調査の概要	5
2	遺構と遺物	5
	(1) 大溝018	5
	(2) 大溝018上層の包含層	18
	(3) 柱穴列	20
	(4) 溝001・溝002	20
	(5) その他遺構出土遺物	21
第3章	まとめ	22

## 挿図目次

第1図	板付遺跡周辺遺跡分布図 (1/25,000) . . . . .	2
第2図	板付遺跡調査地点配置図 (1/2,000) . . . . .	3
第3図	板付遺跡第77次調査地点配置図 (1/200) . . . . .	3
第4図	板付遺跡第77次調査地点全体図 (1/100) . . . . .	4
第5図	調査区土層断面図 (上:東壁 (A-A <sup>^</sup> )、下:南壁 (B-B <sup>^</sup> )) (1/60) . . . . .	6
第6図	大溝018及び拡張トレンチ土層断面図 (C-C <sup>^</sup> ) (1/60) . . . . .	7
第7図	大溝018木器出土状況実測図 (1/30) . . . . .	7
第8図	大溝018出土遺物(1) (1/4) . . . . .	8
第9図	大溝018出土遺物(2) (1/4) . . . . .	9
第10図	大溝018出土遺物(3) (1/4) . . . . .	10
第11図	大溝018出土遺物(4) (1/4) . . . . .	12
第12図	大溝018出土遺物(5) (1/4) . . . . .	14
第13図	大溝018出土遺物(6) (1/4) . . . . .	15
第14図	大溝018出土遺物(7) (1/6) . . . . .	16
第15図	大溝018上面包含層出土遺物 (1/4) . . . . .	17
第16図	柱穴列実測図 (1/20) . . . . .	19
第17図	溝001・溝002実測図 (1/40) . . . . .	20
第18図	溝001・溝002出土遺物 (1/4) . . . . .	20
第19図	その他遺構出土遺物 (1/4) . . . . .	21

## 図版目次

PL1	1. 調査区全景 (西から)	PL4	1. 弥生土器小鉢 (第12図50)
	2. 大溝018木器出土状況 (南西から)		2. 須恵器坏蓋 (第15図73)
PL2	1. 調査区東壁土層 (北西から)		3. 須恵器坏身 (第15図79)
	2. 調査区南壁土層 (北東から)		4. 須恵器高台付坏 (第15図85)
	3. 柱穴012石材検出状況 (東から)		5. 平瓦 (第18図99)
	4. 柱穴017石材検出状況 (北から)		6. 青磁皿 (第19図103)
	5. 大溝018全景 (南東から)		7. 木製鋤 (第13図60)
	6. 溝001・溝002全景 (北東から)		
PL3	1. 弥生土器甕 (第8図4)		
	2. 弥生土器甕 (第9図10)		
	3. 弥生土器甕 (第9図11)		
	4. 弥生土器甕 (第10図26)		
	5. 弥生土器無頸壺 (第11図31)		
	6. 樽型土器 (第11図39)		
	7. 弥生土器蓋 (第11図41)		
	8. 弥生土器器台 (第12図46)		

## 第1章 はじめに

### 1 調査に至る経緯

令和4年3月4日付で福岡市博多区板付5丁目7-115の戸建住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無の照会文書が福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課に提出された。照会地は周知の埋蔵文化財包蔵地である板付遺跡に所在し、周辺の確認調査・発掘調査から遺構の存在が確認されている。また照会地では令和4年3月15日に確認調査を行っている。その結果、地表面下60～70cmで遺構を確認した。これらから埋蔵文化財課では、遺跡保全に関して申請者と協議を行った。

その結果、共同住宅建設において埋蔵文化財への影響が回避できないことから、記録保存のために発掘調査を実施することで合意した。そして令和4年5月10日付で事業者であるあかつき教育図書株式会社を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年5月23日から発掘調査を行い、6月24日に終了した。

### 2 調査の組織

調査委託：あかつき図書株式会社

調査主体：福岡市教育委員会（発掘調査：令和4年度、整理報告：令和5年度）

調査総括：経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課

課長 菅波正人（令和4・5年度）

調査第1係長 本田浩二郎（令和4・5年度）

調査庶務：経済観光文化局文化財活用部文化財活用課

管理調整係長 石川あゆ子（令和4・5年度）

内藤愛（令和4・5年度）

事前審査：経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課

事前審査係長 田上勇一郎（令和4・5年度）

文化財主事 三浦悠葵（令和4年度）

三浦萌（令和5年度）

調査・整理担当：同課（令和5年度から文化財活用課）

山本晃平

### 3 遺跡の立地と環境

福岡平野は、平野東部を北流する御笠川と平野中央部を北流する那珂川によって形成されている。両河川の中流域から上流にかけては多くの支流があり、各支流間には南北に延びる中・低位段丘が多くみられる。現在の御笠川は中流域で支流である諸岡川と分岐し、大きく東側へ蛇行しており、板付遺跡はその御笠川と諸岡川に挟まれた中位段丘とその周辺沖積地に立地する。

板付遺跡は、南北約500m、東西約120m、頂部標高10～20mの中位段丘上に位置し、2つの鞍部を挟み、3箇所の手台部に分けられる。それぞれ北台地、中央台地、南台地と呼称され、環濠を中心とする国指定史跡板付遺跡はこの中央台地に位置する。

板付遺跡の手台地部周辺の沖積地では、中央台地の西側と東側で水田施設の一部が確認されている。また、中央台地の西側沖積地、環濠から南西約50mに位置する調査地点、及び県道調査区で突帯文器単純期、板付I式期の水路、井堰、水口、畦畔が検出されている。この中で突帯文器単純期の水路（幅約2m、深さ約1m）は手台地西側縁辺を北流し、その取・排水は、この水路より西方約80m

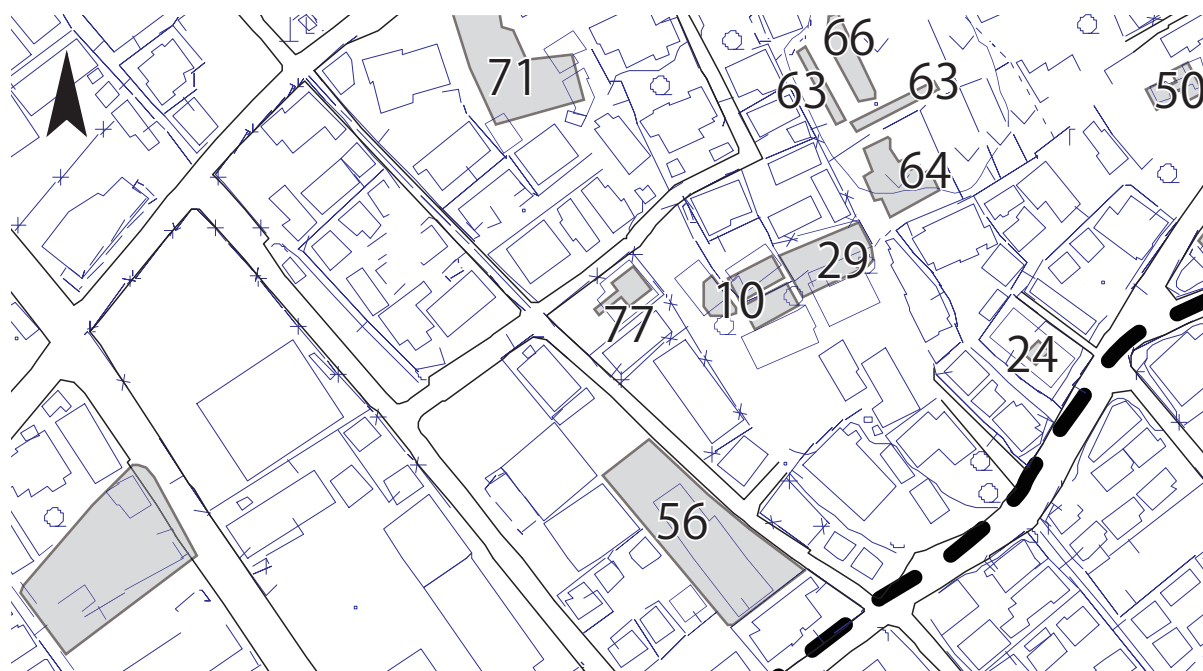


- |           |           |           |            |           |
|-----------|-----------|-----------|------------|-----------|
| 1 板付遺跡    | 2 高畑遺跡    | 3 那珂君休遺跡  | 4 比恵遺跡群    | 5 那珂遺跡群   |
| 6 五十川遺跡   | 7 諸岡A遺跡   | 8 諸岡B遺跡   | 9 東那珂遺跡    | 10 下月隈D遺跡 |
| 11 下月隈C遺跡 | 12 立花寺B遺跡 | 13 井相田D遺跡 | 14 井相田C遺跡  | 15 麦野A遺跡  |
| 16 三筑遺跡   | 17 笹原遺跡   | 18 麦野B遺跡  | 19 井尻B遺跡   | 20 寺島遺跡   |
| 21 笠拔遺跡   | 22 横手遺跡   | 23 日佐遺跡   | 24 野間B遺跡   | 25 大橋E遺跡  |
| 26 三宅遺跡群  | 27 三宅C遺跡  | 28 三宅B遺跡  | 29 和田田蔵池遺跡 | 30 野多目A遺跡 |

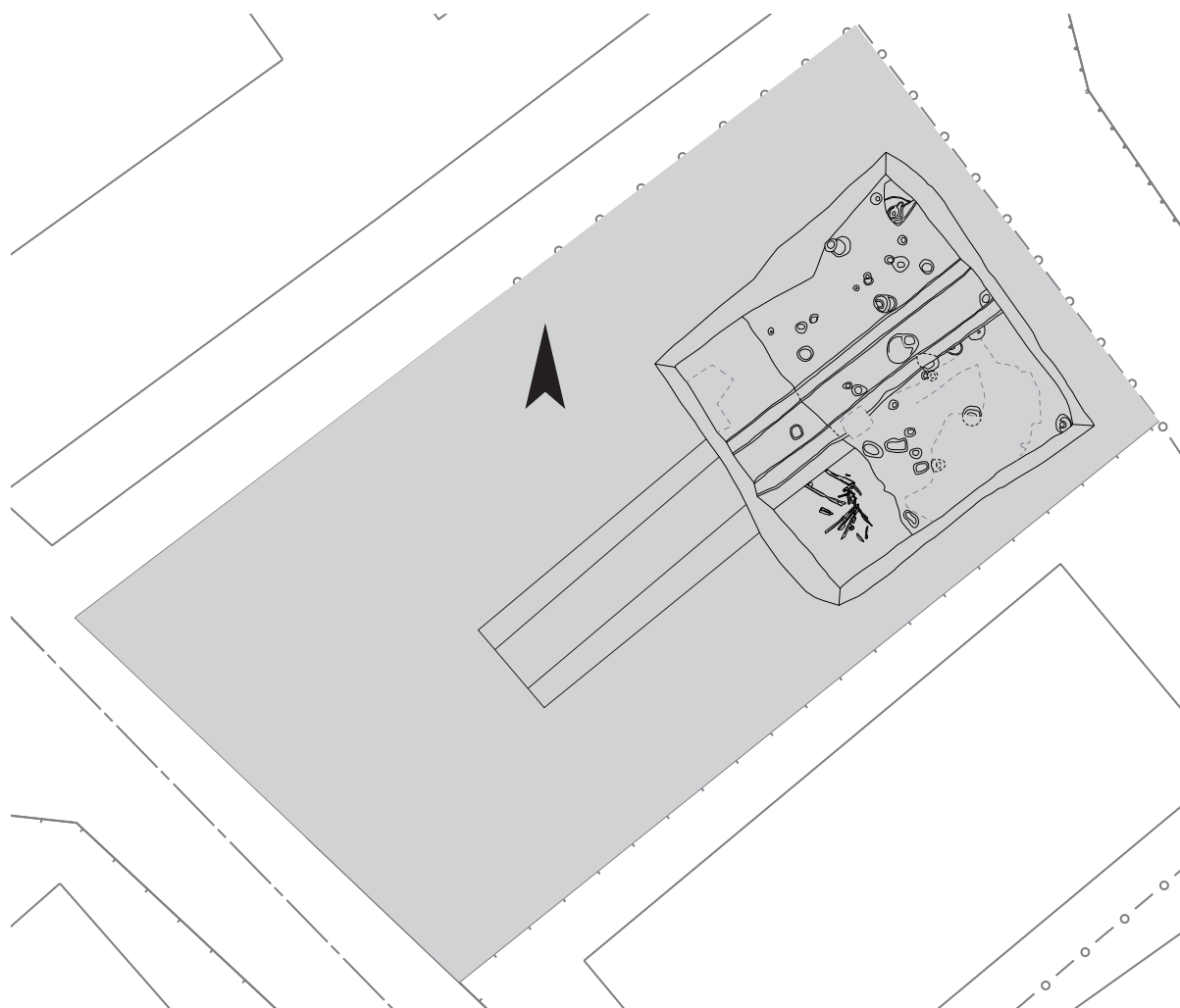
第1図 板付遺跡周辺遺跡分布図 (1/25,000)

に北流する旧諸岡川に求められると推定されている。板付 I 式土器期の水路も前代同様、西側縁辺部を北流する方向で検出された。更に、中央台地と南台地の鞍部や中央台地の東側沖積地に位置する調査地点でも、この時期の水路が検出され、台地東側沖積地の開田が考えられている。

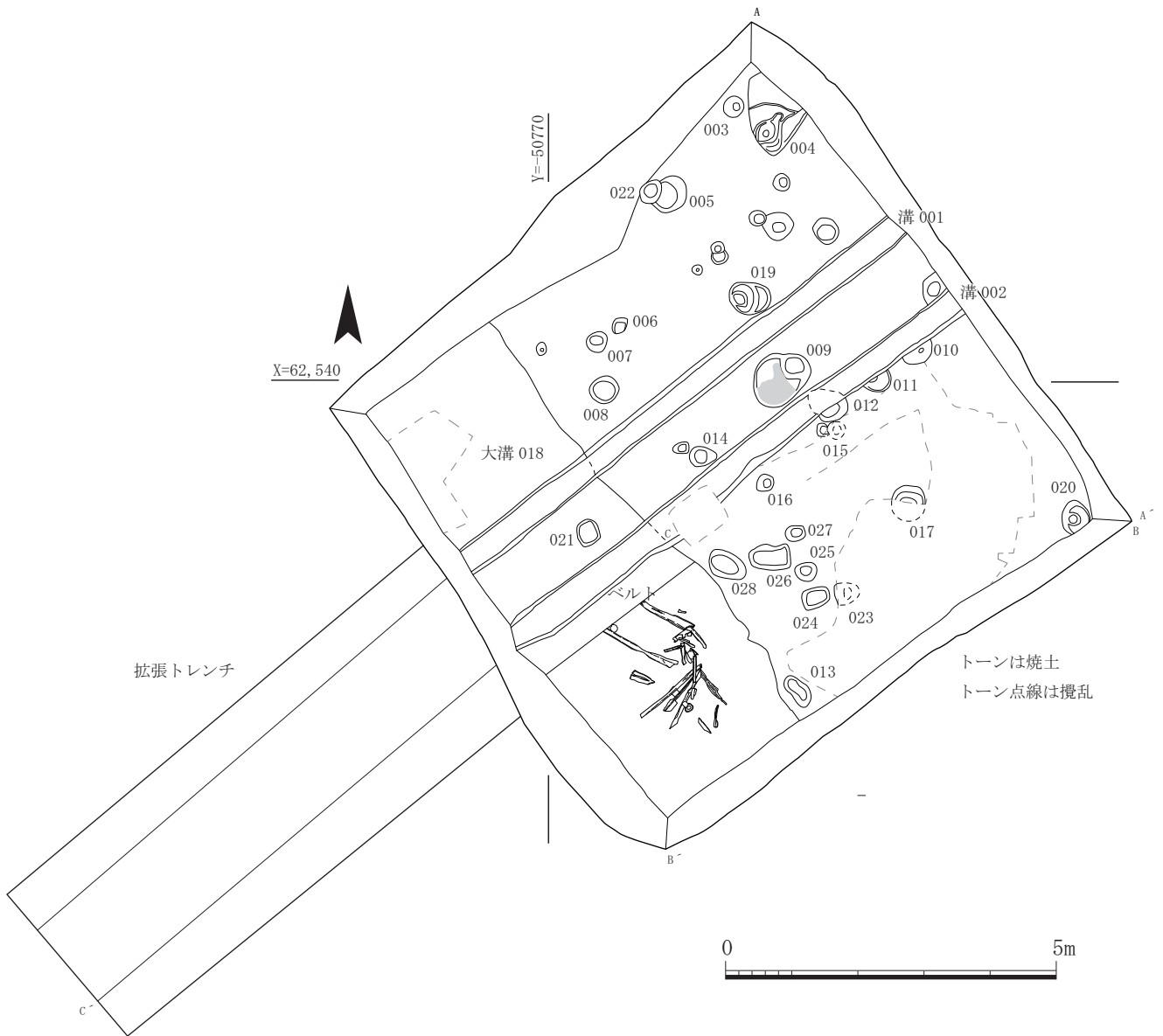
本遺跡を中心にして周辺の遺跡を概観してみると、南方約 2 km にはこれと対峙して、明治 32 年に発見された甕棺内より前漢鏡 30 余面、銅剣、銅矛などが出土した須玖岡本遺跡を含む春日丘陵から



第2図 板付遺跡調査地点配置図 (1/2,000)



第3図 板付遺跡第77次調査地点配置図 (1/200)



第4図 板付遺跡第77次調査地点全体図 (1/100)

の低台地がある。ここから博多駅にかけての範囲は奴国の中心地と言われているところである。そのほぼ全域に遺跡が分布しており、須玖永田遺跡、須玖坂本遺跡、須玖唐梨遺跡、岡本バンジャク遺跡、赤井手遺跡、大谷遺跡等からは青銅器工房関連遺構がみついている。春日丘陵より北東側に繋がる低台地上には、ナイフ形石器などを主体とする旧石器時代遺物をはじめとして弥生時代から古代にかけての遺構や遺物がみられる南八幡遺跡、雑餉隈遺跡などが点在している。西南方の井尻低台地上には井尻B遺跡・五十川遺跡などが位置している。井尻B遺跡では30数次におよぶ調査が行われており、第2・6・12次調査からは旧石器代遺物が出土し、第6次調査では鏡と鏃の鋳型が出土するなど弥生時代から古墳時代の集落が広く分布している。また古代以降の井尻廃寺関連遺構なども注目されている。その北側、本遺跡から北西の方には比恵・那珂遺跡がある。旧石器時代遺物の散布もみられるが、弥生時代中期から古墳時代初頭にかけて計画的な「街区」の形成がみられ、「交易センター」としての都市化がおこなわれたと考えられている。



## 第2章 調査の記録

### 1 調査の概要

今回報告する板付遺跡第77次調査は福岡市博多区板付5丁目7-115に所在する。調査地点は板付遺跡の南西側で、南台地の西側端に位置する。調査対象範囲が申請地のおよそ半分であったため、廃土置き場に問題はなく、土砂の反転等が必要なく一度で調査することができた。遺構検出は重機で遺構面上面まで剥ぎ取ってから実施した。遺構面までは60cmであり、やや東から西へ傾斜している。遺構面まではガラ等を含む攪乱層が見られることから、当時の生活面からやや削平されていると考えられる。検出遺構は、大溝1条、溝2条、柱穴列、その他柱穴・ピット等である。

発掘調査は令和4年5月23日から着手した。まずは重機で遺構面まで剥ぎ取り、並行して発掘調査機材の搬入等を実施した。6月22日に調査を終了したが、調査区西側で確認された大溝の幅を確認するためにトレンチを拡張した。トレンチ内の土層を確認・実測後、翌23日に埋め戻しを行い、合わせて発掘調査機材等の搬出を行い、すべての調査が終了した。

### 2 遺構と遺物

以下、遺構種別ごとに調査遺構及び出土遺物について報告する。

#### (1) 大溝018 (第6図)

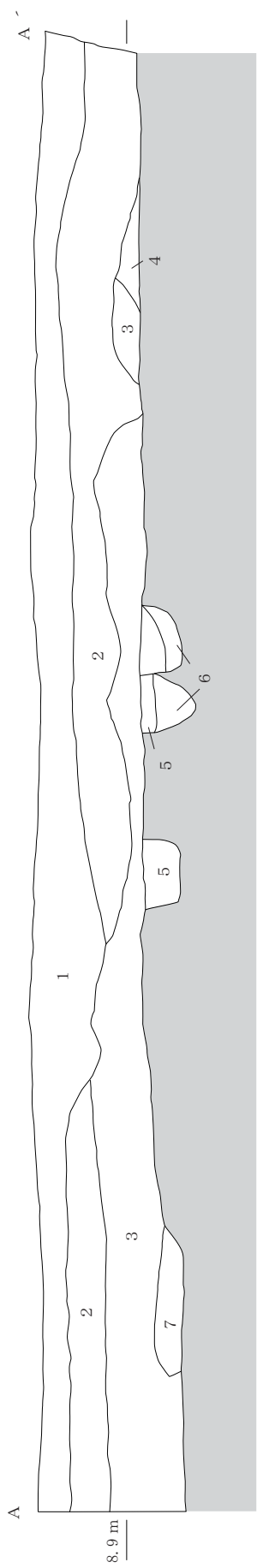
調査区南西側から確認された大溝である。上面に灰褐色粘質土、赤灰褐色粘質土、暗褐色粘質土等の須恵器や土師器を含んだ古代の包含層があり、その下層から灰褐色～黒褐色粘質土を主体とする大溝018を検出した。確認できた長さで約7.5mである。幅はトレンチを拡張して確認したが、明確な溝の立ち上がりがわからず、今回の申請地外まで延びる可能性もある。ただ第16層・第17層にてシルト層～砂層になっており、明確に大溝の埋土とは異なることから、ここを大溝の端と捉えることもでき、その場合大溝の幅はおよそ9mと考えられる。また、第14層・第15層で別の溝の痕跡があることから、掘り直しと思われる。

比較的浅い段階で湧水しており、第10層(第6図)以下の掘削は湧水による壁の崩落等の危険性から、人力での掘削をやめ、調査の最後に重機による掘削で大溝の底を確認しようと試みた。しかし掘削直後から著しい湧水のため、土層断面などは確認できず、調査区の壁の崩落の危険性も考えられたことから、すぐに埋め戻しを行った。ただ掘り起こした土を確認すると砂層になっており、第10層の黒褐色粘質土はほとんど見られなかった。またその砂層から土器の出土も確認できなかったため、大溝の底に達していたとも推定される。深さは地表面下約90cm以上と考えられる。

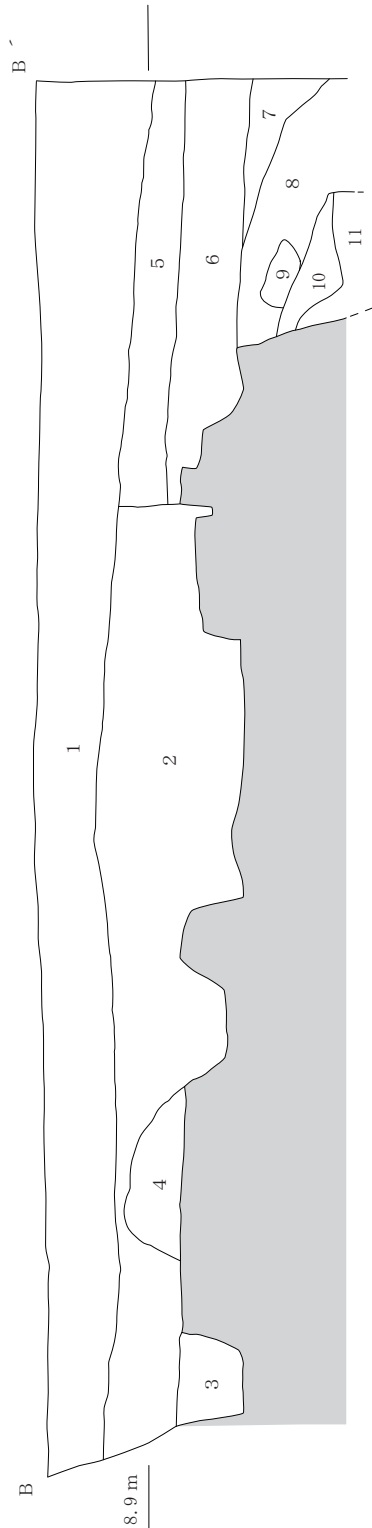
出土遺物の詳細は後述するが、第6層・第10層(第6図)からは弥生土器片が、また特に第10層からは木器・木材片が多量に出土している。第7図に木器出土状況を示している。

**出土遺物(第8～14図)** 大溝018からは多量の弥生土器片、木器類、石製品、土製品等が出土している。コンテナ箱40箱以上に及ぶ。紙面の都合上すべてを掲載できないが、主だったものについて報告を行う。

1～26は弥生土器の甕である。1～12は逆L状の口縁をもつ甕である。1は口縁部の内側に張り出しが見られない。復元口径30.4cmをはかる。胎土は2mm以下の白色粒・橙色粒子・雲母を含む。焼成は良好で、色調はにぶい橙色をなす。口縁部はヨコナデを、内面はナゲ調整、外面にはタテハケ調整を施している。2～7までは口縁部の内側に張り出しを持つ。2は復元口径22.0cmをはかる。胎土は3mm以下の石英・長石粒を多く含む。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色をなす。口縁端部は



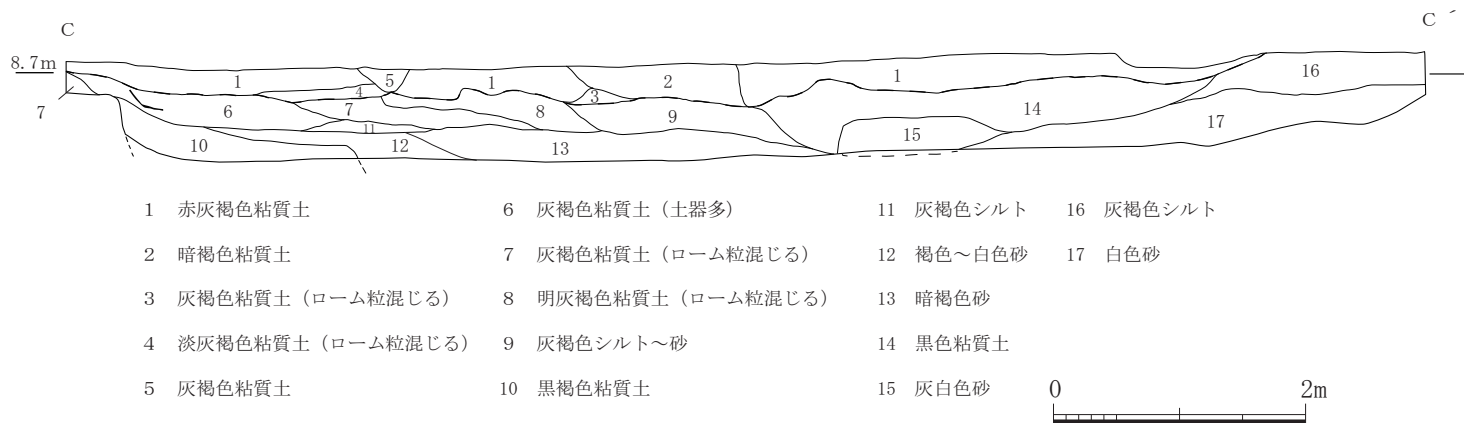
- 1 砕石
- 2 攪乱
- 3 灰褐色粘質土
- 4 橙褐色粘質土
- 5 灰褐色粘質土 (炭化物・ローム粒混じる)
- 6 灰褐色粘質土
- 7 暗灰褐色粘質土 (白色粘土混じる)



- 1 砕石
- 2 攪乱
- 3 暗灰褐色粘質土 (020)
- 4 橙褐色粘質土
- 5 灰褐色粘質土 (しまりが強い)
- 6 黒色粘質土
- 7 褐色砂
- 8 黒色粘質土 (土器多量を含む)
- 9 黄褐色粘質土
- 10 黒褐色粘質土 (灰白色シルト混じる)
- 11 灰白色シルト



第5図 調査区土層断面図 (上：東壁 (A-A'), 下：南壁 (B-B')) (1/60)



第6図 大溝018及び拡張トレンチ土層断面図 (C-C') (1/60)

ヨコナデ、内面はナデ調整を、外面はタテハケ調整を施している。また胴部外面にススが付着している。

3は口径24.6cmをはかる。胎土は3mm以下の白色粒・雲母を含む。焼成は良好で、色調はにぶい橙色をなす。口縁端部はヨコナデ調整、内面はナデ調整と指押え痕、外面にはタテハケ調整を施している。口縁端部から胴部外面にかけてススの付着が見られる。

4は復元口径27.4cmをはかる。胎土は3mm以下の白色・透明粒・橙色粒子・雲母を含む。焼成は良好で、色調はにぶい橙色をなす。口縁部はヨコナデ調整、内面はナデ調整、外面にはタテハケ調整を施している。口縁端部から胴部外面にかけてススが付着している。

5は復元口径22.2cmをはかる。胎土は2mm以下の白色粒・赤色粒・雲母を含む。焼成は良好で、色調は浅黄橙色をなす。口縁下には断面三角形の突

帯一条をめぐらしている。外面は丹塗りされている。口縁部はヨコナデ、内外面はナデ調整を施している。

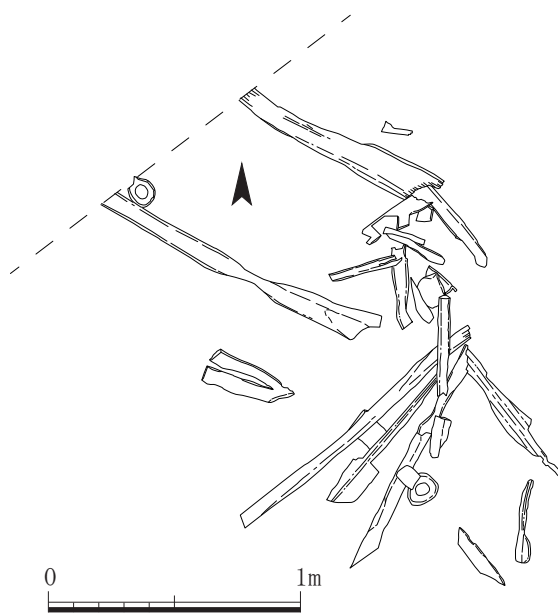
6は一部つながらない箇所はあるが、胎土などから同一個体である。口径25.2cm、底径8.0cmをはかる。胎土は4mm以下の石英・長石粒多く3mm以下の赤色粒を若干含む。焼成は良好で色調はにぶい橙色をなす。底部はやや上げ底になっている。口縁端部はヨコナデ、内面はナデ調整、指押え痕が確認できる。外面はタテハケ調整を施している。

7は口径33cm、器高35.3cm、底径7.4cmをはかる。胎土は石英・長石粒・雲母を多く含む。焼成は良い。色調はにぶい橙～橙色をなす。底部は平底である。口縁部はナデ調整、内面の口縁下はヨコハケ調整、胴部はタテハケのちナデ消したような痕跡が確認できる。胴部下

部は指押え痕がある。胴部外面はタテハケ調整を施している。8・9はくの字に屈曲する口縁を持つ。8は口径24.6cmをはかる。胎土は精緻、微粒の白色粒・雲母を多く含む。焼成良い。色調は内面が浅黄橙色、外面がにぶい黄褐色をなす。器面の状態が悪く摩滅しており、調整は不明である。

9は碎片のため、法量は不明である。胎土は粗い3mm以下の白色粒を多く含む。焼成良い。色調はにぶい黄橙色をなす。口縁部外面に薄くヨコハケが見られる。内面はナデ調整を施している。

10は胎土等から同一個体と考える。口縁下に断面三角形の突帯一条をめぐらしている。口縁内側への張り出しは強く、端部は丸くおさめる。底部は平底である。口径44.0cm、底径10.5cmを



第7図 大溝018木器出土状況実測図 (1/30)

口縁部はヨコナデ、内外面はナデ調整を施している。

口縁部はヨコナデ、内外面はナデ調整を施している。

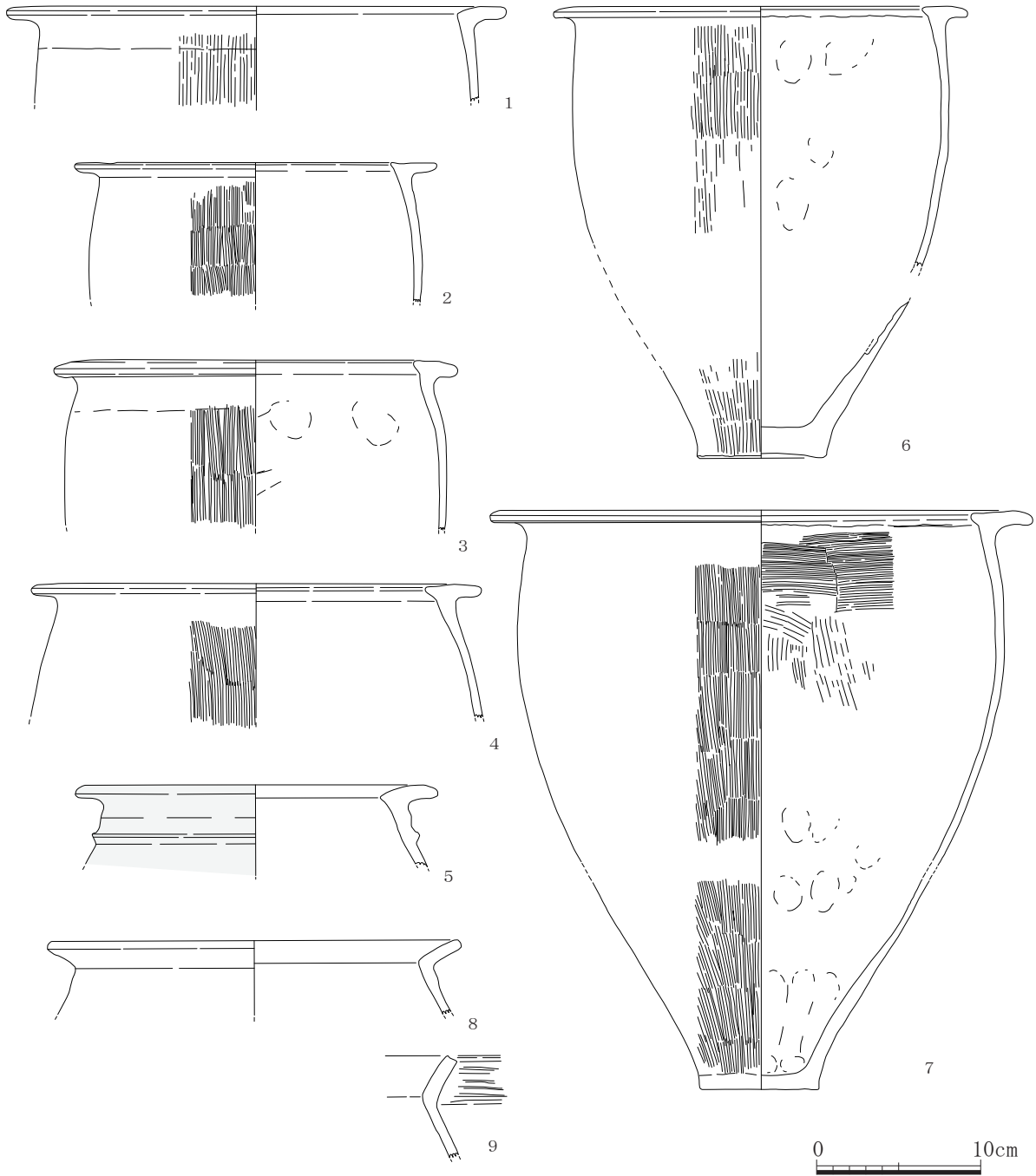
口縁部はヨコナデ、内外面はナデ調整を施している。

口縁部はヨコナデ、内外面はナデ調整を施している。

口縁部はヨコナデ、内外面はナデ調整を施している。

口縁部はヨコナデ、内外面はナデ調整を施している。

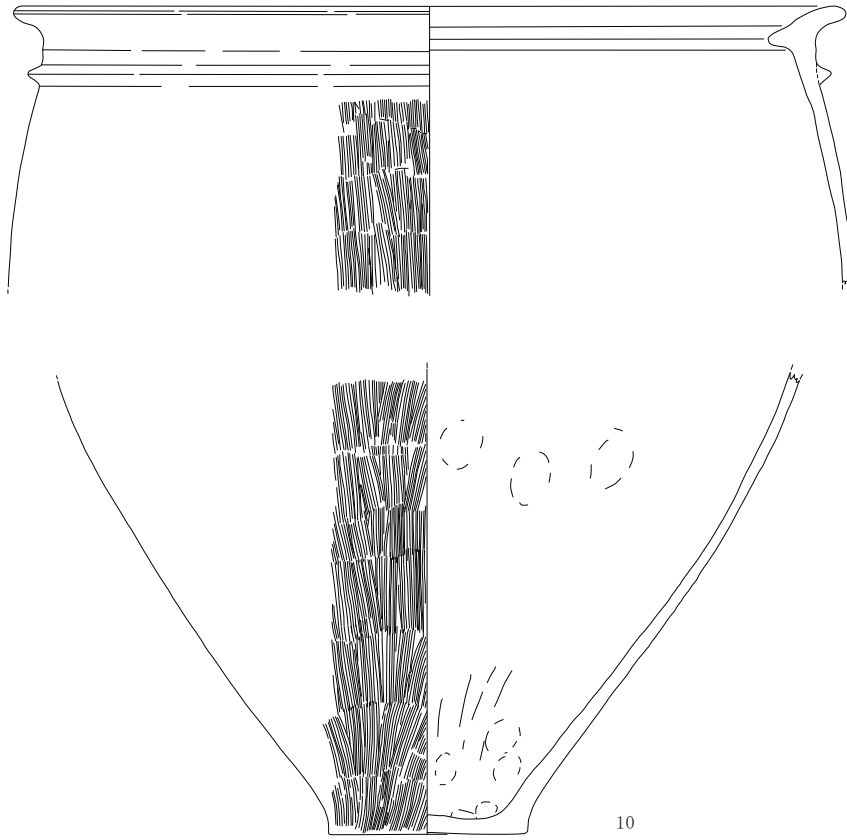
口縁部はヨコナデ、内外面はナデ調整を施している。



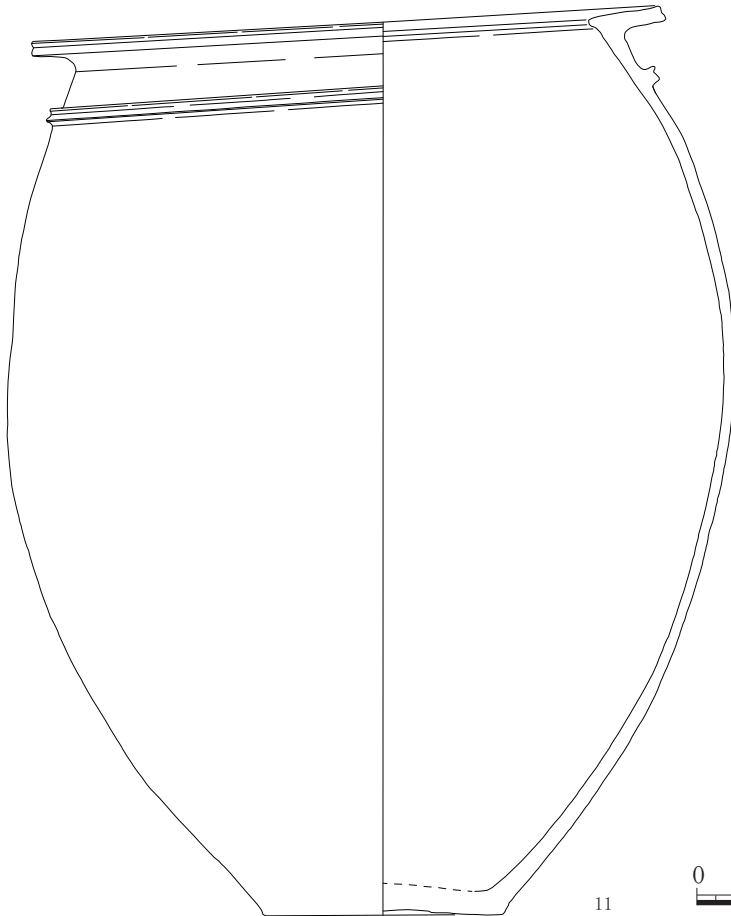
第8図 大溝 018 出土遺物 (1) (1/4)

はかる。胎土は5mm以下の石英・長石粒・雲母を含む。焼成は良好で、色調は灰褐〜にぶい橙色をなす。口縁部はヨコナデ調整、内面はナデ調整で胴部下半部に指押え痕がある。外面は突帯以下にタテハケ調整を施している。11は口縁下に断面M字形の突帯一条をめぐらしている。口縁内側への張り出しはやや弱く、端部は平坦をもつ。器形はやや傾いている。底部はややあげ底である。12は口縁下と胴部中央に断面M字形の突帯をそれぞれ一条めぐらしている。口縁平坦部にヘラによる線をめぐらしている。また口縁部とM字形突帯の間に細い線で縦に刻みがある。外面前面に丹塗りされている。底部は平底である。

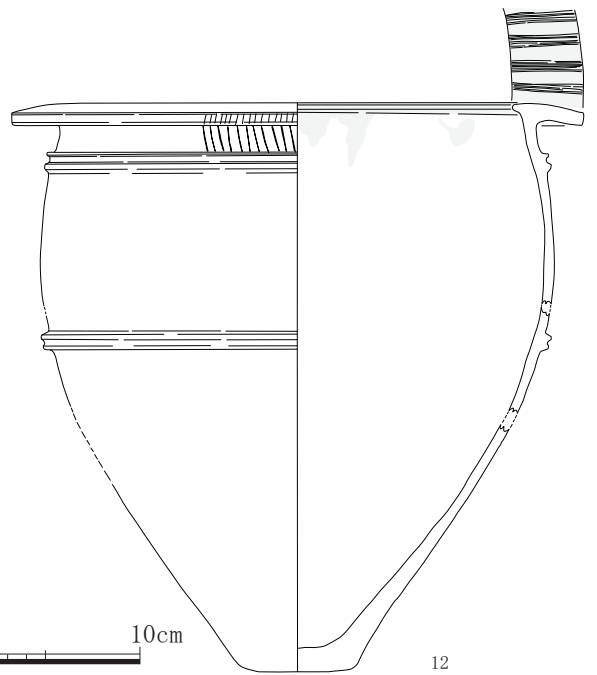
13～15は逆L字状の口縁を持つ小型の甕である。13は口縁内外側への張り出しは短い。口縁部か



10



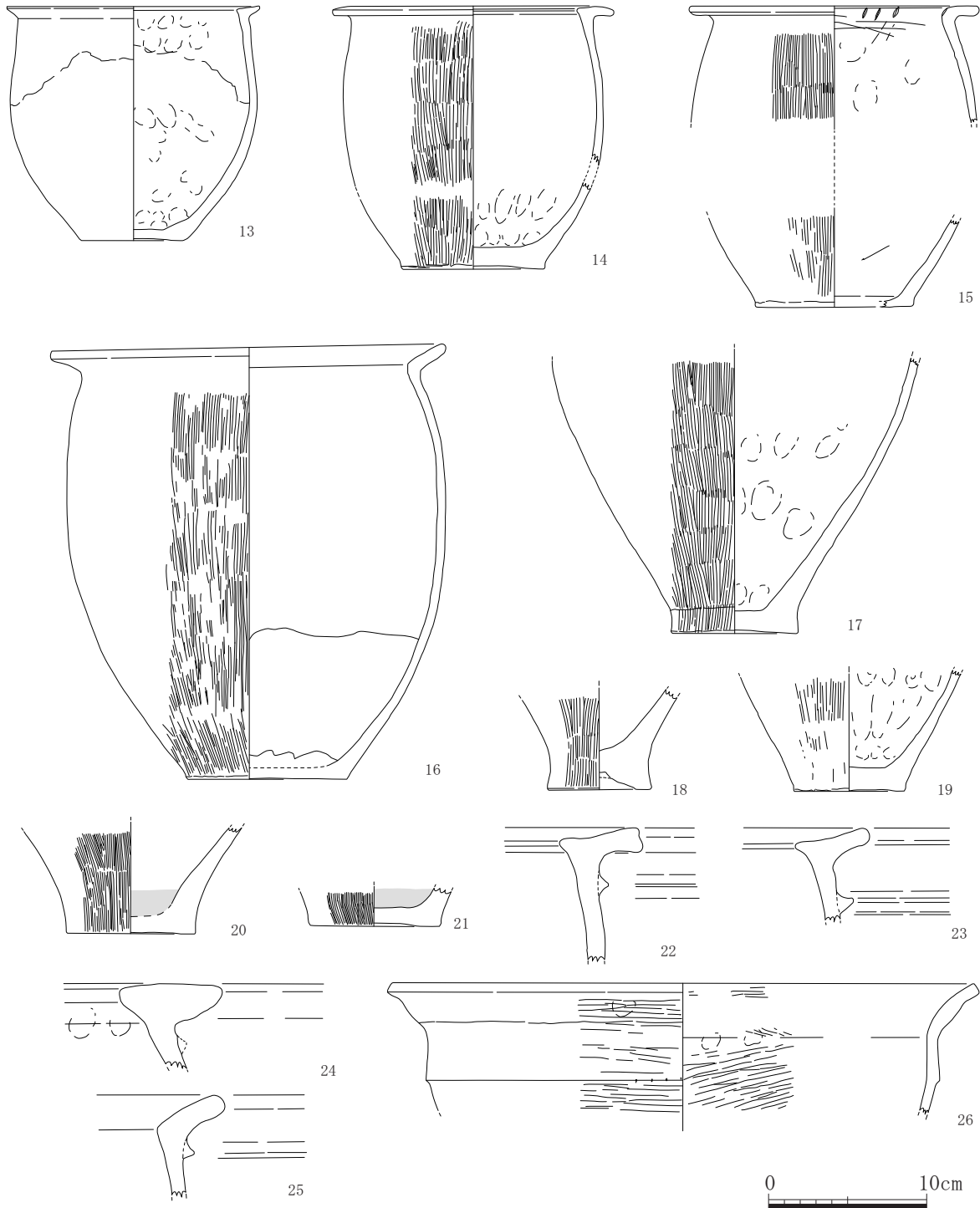
11



12

0 10cm

第9図 大溝 018 出土遺物 (2) (1/4)



第10図 大溝018出土遺物(3) (1/4)

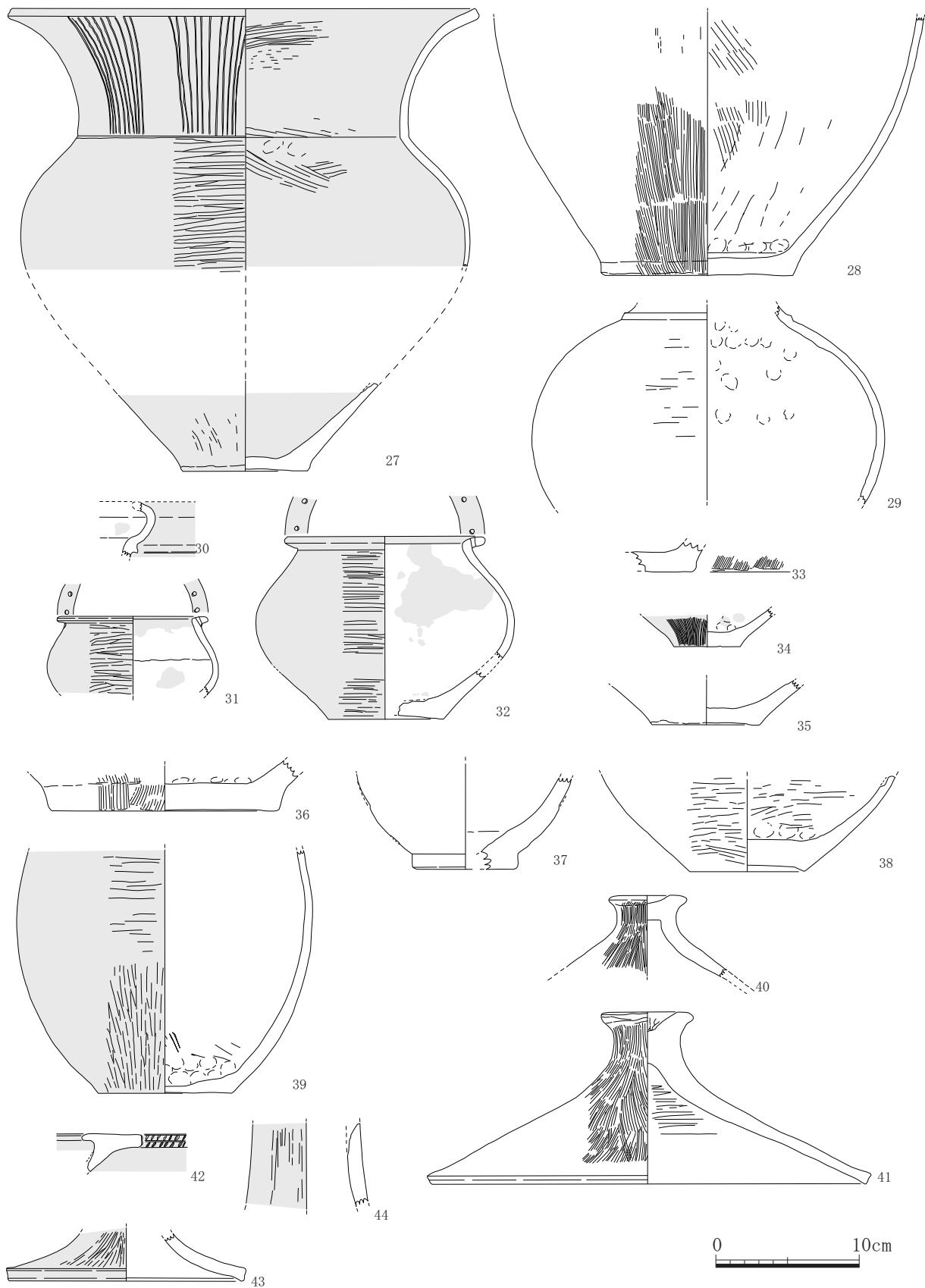
ら胴部上半部にかけてススが付着している。底部はやや上げ底である。外面全面に非常に薄く丹塗りが確認できる。口径16.0 cm、器高14.8 cm、底径6.6 cmをはかる。胎土は精緻で2 mm以下の白色粒・赤色粒・雲母を含む。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色をなす。内外面共にナデ調整で内面に指押え痕がある。14は口縁内側への張り出しが弱い。底部はやや上げ底である。口径17.8 cm、底径9.0 cmをはかる。胎土は精緻で白色粒を若干含む。焼成は良い。色調は橙～黄橙色をなす。口縁部から内面にかけてはナデ調整、外面はタテハケ調整を施している。15は口縁部に3か所の刻み目を持つ。

底部は平底である。口径 18.4 cm、底径 10 cmをはかる。胎土は 2 mm以下の石英・長石粒を多く含む。焼成は軟質で、色調は淡橙色をなす。口縁部はヨコナデ調整、内面はやや摩滅しており不明な点が多いが、胴部上半部には指押え痕がある。外面はタテハケ調整を施している。16 はくの字状の口縁で端部は丸くおさめる。内面底付近にやや黒色を呈す部分があり、煮炊きの痕跡か。底部は平底である。口径 26 cm、器高 27.5 cm、底径 10.0 cmをはかる。胎土は 5 mm以下の石英・長石粒を多く含む。焼成は良好で、色調は灰白～浅黄橙色をなす。口縁部はヨコナデ、内面はナデ調整である。外面はタテハケ調整を施している。17 は胴部下半部から底部のみ残存している。底部はやや上げ底である。底径 8 cmをはかる。胎土は 2 mm以下の石英・長石粒を多く含む。焼成は良く、色調は浅黄橙～灰褐色～褐灰色をなす。二次焼成のため、内外面ともに褐灰色の部分が多い。調整は内面に指押え痕があり、外面はタテハケ調整が密に施している。18 は上げ底である。底径 6.4 cmをはかる。胎土は 3 mm以下の石英・長石粒・雲母を含む。焼成は良く、色調は外側が浅黄橙色、内側が明褐灰色をなす。内面はナデ調整で、外面はタテハケ調整を施している。19 はやや上げ底をなす。底径 7.0 cmをはかる。胎土は 2 mm以下の白色粒・雲母を含む。焼成良く、色調は内面を灰白色～にぶい黄橙色、外面を灰黄褐色をなす。調整は内面が指押え痕が顕著で、外面はタテハケ調整を施している。20・21 には内底に炭化物が付着している。20 は平底である。底径 8.2 cmをはかる。胎土は 5 mm以下の石英・長石粒を含む。焼成良く、色調は外面が橙色、内面が灰褐色～褐灰色をなす。調整は内面がナデ調整で、外面はタテハケ調整を施している。21 はやや上げ底である。底径 8.3 cmをはかる。胎土は 3 mm以下の白色粒・褐色粒を含む。焼成良く、色調はにぶい褐色をなす。外面にタテハケ調整を施している。

22～25 は大型の甕の口縁部片であり、逆 L 字状の口縁をなす。22～24 は内側への張り出しが強い。25 は内側への張り出しがない。口縁下に断面三角形の突帯一条をめぐらしているが、24 は外れており痕跡のみ。22 は胎土 2 mm以下の石英・長石粒・雲母を含む。焼成は良好で、色調は橙色をなす。口縁部はヨコナデ、他はナデ調整を施している。23 は胎土に微粒の白色微粒・雲母を含む。焼成は良い。色調は黄灰～にぶい褐色をなす。口縁部はヨコナデ、他はナデ調整を施している。24 は胎土は 2 mm以下の石英・長石粒・橙色粒子・雲母を含む。焼成は良い。色調は浅黄橙色をなす。口縁部はヨコナデ、他はナデ調整を施している。25 は胎土に 2 mm以下の白色粒・褐色粒を含む。焼成は良い。色調は淡橙～橙色をなす。口縁部ヨコナデ、他はナデ調整を施している。

26 は口縁 37.6 cmをはかる。胎土は 2 mm以下の石英・長石粒・雲母含み、ほんの少し赤色粒子もみられる。焼成良好で、色調は内面が浅黄橙色、外面が橙色をなす。

27～38 は弥生土器の壺である。27 は丹塗磨研壺である。底部はやや上げ底である。復元口径 32.4 cm、底径 8.8 cmをはかる。胎土は精緻で白色粒子を若干含む。焼成良く、色調は淡橙～にぶい橙色をなす。口縁部から頸部にかけて等間隔で工具で文様を刻んでいる。調整は口縁部から頸部内面まで粗いヨコハケ調整、胴部外面には横方向に、底部付近には縦方向にヘラミガキを施している。28 は胴部下半部から底部が残存している。底部は平底である。底径 13.2 cmをはかる。胎土は 3 mm以下の白色粒・褐色粒を含む。焼成は良好で、色調はにぶい橙色をなす。胴部内面には粗いハケ目があり、底部には指押え痕が見られる。外面はタテハケ調整を施している。29 は無頸壺と思われる。頸部に断面三角形と思われる突帯一条をめぐらしている。胎土は 2 mm以下の白色粒を多く含む。焼成は良好で堅い。色調は外面がにぶい黄橙色、内面が浅黄橙色をなす。内面にはナデ調整をなし、指押え痕が顕著である。外面には横方向のヘラミガキと思われる痕跡が見られる。30 は袋状口縁壺の口縁部片と考える。口縁下に断面三角形の突帯一条をめぐらしている。外面全面と内面の一部は丹塗りされている。胎土は精緻で微粒の白色微粒・黒色微粒・雲母を含む。焼成は良く、色調はにぶい黄橙色をなす。調整



第11図 大溝018出土遺物(4) (1/4)



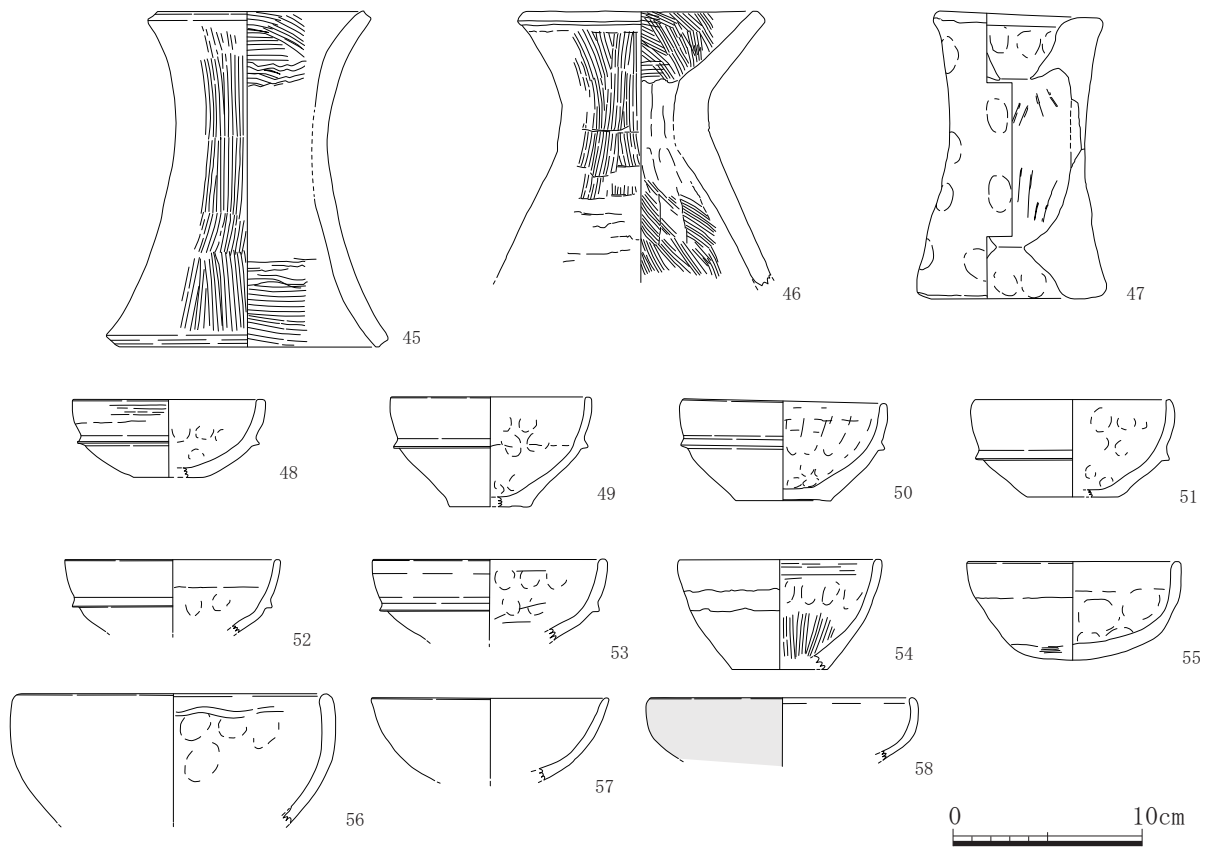
はナデ調整である。31・32は無頸壺である。口縁部に紐を通すための穿孔が4か所ある。外面全面と内面の一部に丹塗りされている。31は口径10.6 cmをはかる。胎土は精緻である。焼成は良く、色調は浅黄橙～にぶい黄橙色をなす。内面はヨコナデ調整で、外面は横方向のヘラミガキを施している。32は口径14.0 cm、器高推定12.7 cm、底径8.2 cmをはかる。胎土は精緻で白色微粒子・雲母を少量含む。焼成は良好で、色調は浅黄橙色をなす。内面はヨコナデ調整で、外面は横方向のヘラミガキを施している。底部はやや上げ底である。33～38は底部のみである。33は平底である。胎土は2 mm以下の石英・長石粒・雲母を含む。焼成は良好で色調は内面を浅黄橙色、外面は黒色をなす。内面にはナデ、外面にはタテハケ調整を施している。34は平底である。外面全面と内面の一部は丹塗りされている。底径4.6 cmをはかる。胎土は精緻で白色粒子を少し含む。焼成良く、色調はにぶい橙色をなす。内面はナデ、外面はタテハケ調整を施している。35はやや上げ底である。底径7.4 cmをはかる。胎土は精緻で2 mm以下の白色粒・雲母を含む。焼成は普通で、色調は褐灰色をなす。器壁表面は摩滅しており、調整は不明である。36は若干上げ底である。底径16.0 cmをはかる。胎土は3 mm以下の石英・長石粒・雲母を含む。焼成は良く、色調は内面は黄褐色、外面は灰黄褐色をなす。内面には指押え痕が見られ、外面にはタテハケ調整を施している。37は平底である。底径7.4 cmをはかる。胎土は3 mm以下の石英・長石粒・雲母を含む。焼成は軟質で、色調は橙色をなす。器壁表面は摩滅しており、調整は不明である。38は上げ底である。底径8.0 cmをはかる。胎土は1 mm以下の白色粒と雲母と3 mm大の橙色粒子が見られる。焼成は堅緻で色調は灰白～浅黄橙色をなす。内外面には横方向のヘラミガキと思われる痕跡が見られる。内底には指押え痕が見られる。

39は樽型土器である。底部は平底である。外面全面は丹塗りされている。底径9.3 cmをはかる。胎土は4 mm以下の石英・長石粒・雲母を含む。焼成は良好で、色調はにぶい橙色をなす。内面はナデ調整であるが、底部付近では指押え痕と工具痕が顕著に見られる。外面は胴部上半部に横方向の、下半部には縦方向のヘラミガキを施している。

40・41は蓋である。40はつまみ径5.5 cm、底径7.4 cmをはかる。胎土は石英・長石粒を含む。焼成は良好で、色調は灰白～淡黄橙色をなす。外面にはタテハケ調整を施している。つまみの天井部はナデ調整である。41はつまみ径6.3 cm、器高12.0 cm、裾部径30.2 cmをはかる。胎土は4 mm以下の石英・長石粒・雲母多く含む。焼成は良好で色調は橙色をなす。外面にはタテハケ調整を施しており、裾部付近はナデ調整である。内面はナデ調整である。

42～44は高坏である。42は口縁部のみ残存しており、口縁端部に刻み目が見られる。内外面全面が丹塗りされている。胎土は精緻で微粒の白色粒と雲母を若干含む。焼成は良く色調は橙色をなす。ナデ調整である。43は脚部のみ残存しており高坏のものとする。外面全面が丹塗りされている。脚部径16.6 cmをはかる。胎土は精緻で2 mm以下の白色粒・褐色粒・雲母を含む。焼成は良く、色調は橙色をなす。外面には縦方向のヘラミガキが見られる。内面はナデ調整である。44は脚部の胴部のみ残存している。外面全面が丹塗りされている。胎土は精緻である。焼成は良く、色調は橙色をなす。外面には縦方向のヘラミガキが見られ、内面はナデ調整である。

45・46は器台である。45はほぼ完形である。受部径11 cm、器高17.7 cm、裾部径13.7 cmをはかる。焼成は良好で色調は浅黄橙～黄橙色、裾外側は黒～褐色灰色、内側はにぶい黄橙色をなす。受部内面にはナナメハケ調整、裾部にはヨコハケ調整が見られる。また受部と裾部に波状の工具痕が見られる。外面全面にタテハケ調整を施している。46は裾部が欠損している。くびれ部が細くなっている。受部径13.0 cmをはかる。胎土は3 mm以下の石英・長石粒を多く含む。焼成は良好で、色調はにぶい橙色～灰褐色をなす。内面には粗いハケ調整を施している。受部～くびれ部外面には粗いハケ調整を、

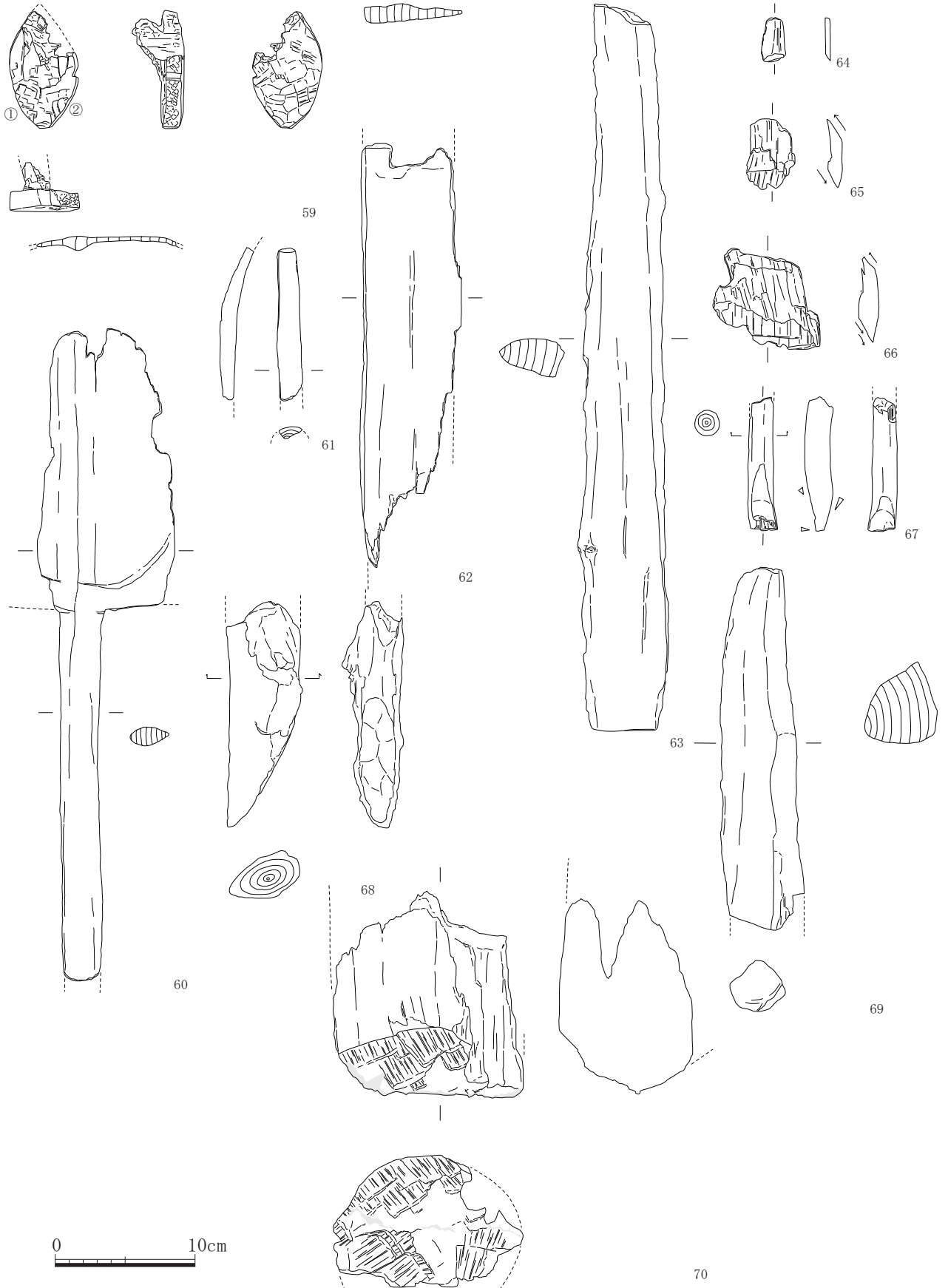


第12図 大溝018出土遺物(5) (1/4)

くびれ部以下はナデ調整である。

47は支脚である。上下に孔が空いており、中は空洞になっている。口径9.0cm、器高15.4cm、底径10.0cmをはかる。胎土は精緻で微粒の雲母・白色粒を多く含む。焼成良く色調は明褐灰色をなす。空洞内には工具痕を考えられる痕跡が見られる。内外面全面に指押え痕が顕著に見られる。

48～58は鉢である。48～53までは小型の鉢で胴部に断面三角形の突帯一条をめぐらしている。48は平底である。口径10.2cm、器高4.1cm、底径3.6cmをはかる。胎土は精緻で白色微粒子・雲母を含む。焼成良く色調はにぶい橙色をなす。外面は口縁部～突帯まではヨコナデ、突帯～底部まではナデ調整である。内面はナデ調整で指押え痕が見られる。49は平底である。口径10.6cm、器高5.8cm、底径7.2cmをはかる。胎土は精緻で白色微粒子・雲母を少量含む。焼成は良く色調は橙色をなす。内外面はナデ調整で、内面には指押え痕が見られる。50は平底である。口径11.0cm、器高5.4cm、底径5.0cmをはかる。胎土は精緻で微粒の白色粒・雲母を含む。焼成良く色調はにぶい橙色をなす。内外面はナデ調整で、内面には指押え痕が顕著に見られる。51は平底である。口径10.4cm、器高5.1cm、底径4.8cmをはかる。胎土は精緻で微粒の白色粒・雲母を含む。焼成は良く色調はにぶい橙色をなす。外面にはヨコナデ調整が、内面には指押え痕が見られる。52は口径11.4cmをはかる。胎土は精緻で白色微粒子・雲母を含む。焼成は良く色調は明褐灰色をなす。内外面はヨコナデ調整で、内面には指押え痕が見られる。53は口径12.6cmをはかる。胎土は精緻で微粒の白色粒・黒色粒・雲母を含む。焼成良く色調はにぶい橙色をなす。外面はナデ調整で、内面には指押えのちナデ調整を施している。54は胴部に突帯がとれた痕跡が見られる。口径10.6cm、器高5.8cm、底径5.0cmをはかる。胎土は精緻で白色微粒子・雲母を含む。焼成は良く色調はにぶい橙色をなす。内面は口縁部はヨコナデ調整が見られる。胴部上半部には指押え痕が見られ、下半部にはタテハケ調整を施している。55は底部



第13图 大溝018出土遺物(6) (1/4)

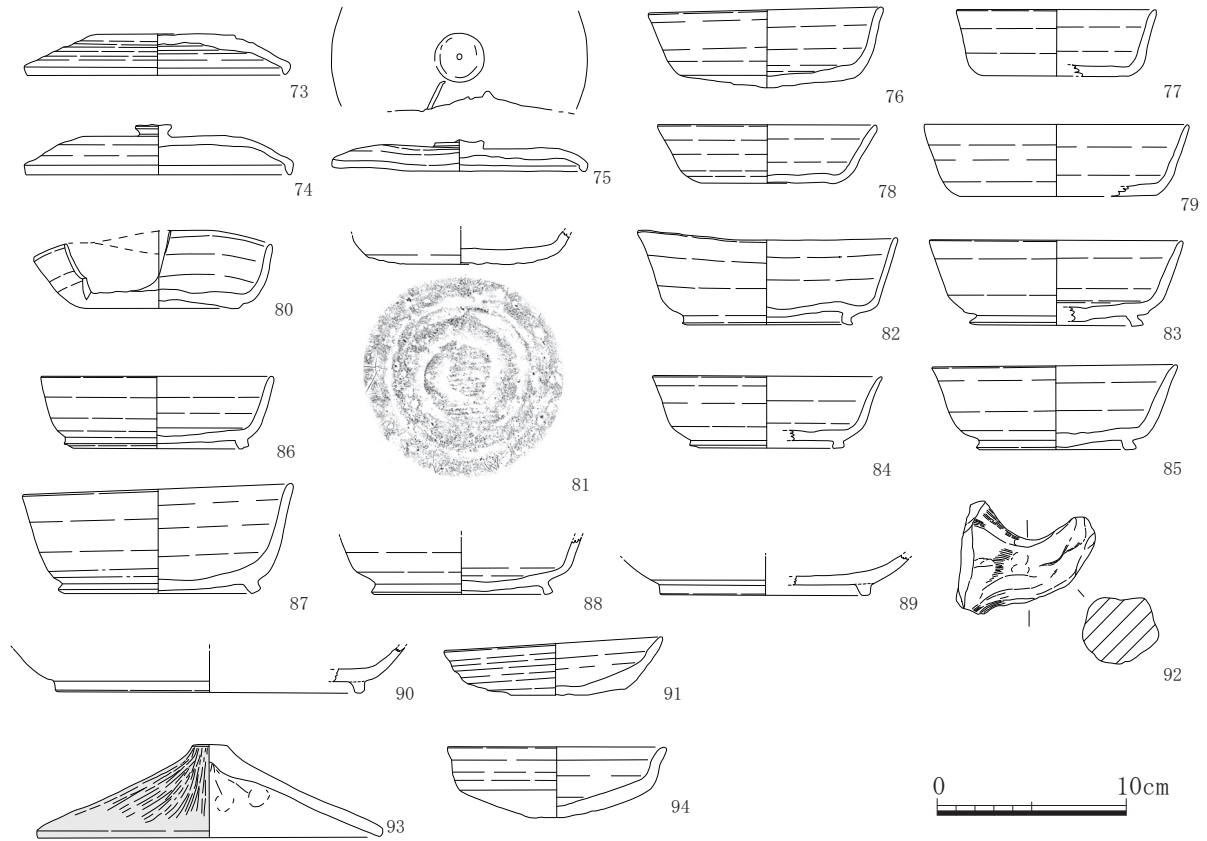
はやや丸みを帯びている。口径 11.3 cm、器高 5.2 cmをはかる。胎土は 5 mm 以下の石英・長石粒・雲母を多く含む。焼成は軟質で色調はにぶい黄橙色をなし半分くらい黒くなっている。器壁表面は摩滅しているため、不明な点が多いが内外面ともにナデ調整で、底部外面に一部ヨコハケ調整の痕跡が見られる。内面には指押え痕が見られる。**56** は復元口径 16.8 cmをはかる。胎土は 3 mm 以下の白色粒・雲母を含む。焼成は良好で色調はにぶい橙色をなす。外面はナデ調整で、内面は指押え成形のちナデ調整を施している。**57** は口径 12.6 cmをはかる。胎土は 2 mm 以下の白色粒・赤色粒・黒色粒・雲母を多く含む。焼成軟質で色調は橙色をなす。器壁表面が摩滅しており、調整は不明である。**58** は浅鉢である。外面全面が丹塗りされている。口径 14.0 cmをはかる。胎土は精緻で白色粒子・赤色粒子を若干含む。焼成良く色調はにぶい橙色をなす。器壁表面が摩滅しており、調整は不明である。

**59** ~ **72** は木器・木材である。多くは第 10 層の黒褐色粘質土（第 6 図）から出土した。小片も含めると多くの木材が出土している。また図化できていないが、桃の種や種子の皮等も出土している。

**59** は杓子の把手である。把手部分の長軸 8.6 cm、短軸 5 cm、厚さ 1.8 cmをはかる。樹種は広葉樹と思われる。表面は研磨しておらず、成形に際しては側面①には鉋等による加工痕が見られる。側面②には槌で打撃する加工痕が見られる。**60** は木製の鋤である。刃縁は残存しておらず、刃部側面も残存していない。また柄が土圧で扁平に変形している。残存全長 46.2 cm、残存刃部長 20 cm、残存身幅 10 cmをはかる。樹種は広葉樹で柾目材である。**61** はやや反りを持つことから木製の弓かと思われる。表面に漆と思われる黒色の皮膜が確認できる。残存長 10.8 cm、残存幅 1.8 cm、残存厚さ 1.2 cmをはかる。樹種は広葉樹で芯持材である。**62** は板材である。残存長 30.4 cm、残存幅 7 cm、残存厚さ 1.2 cmをはかる。樹種は広葉樹で柾目材である。**63** は板材である。残存長 51.8 cm、残存幅 6.4 cm、残存厚さ 2.8 cmをはかる。樹種は広葉樹で 8 分割された柾目材である。**64** は加工屑である。残存長 3 cm、残存幅 1.8 cm、残存厚さ 4 cmをはかる。側面に加工痕が確認できる。樹種は針葉樹で柾目材である。**65** は加工屑である。残存長 5 cm、残存幅 3.4 cm、残存厚さ 1.1 cmをはかる。側面に加工痕が確認で



第 14 図 大溝 018 出土遺物 (7) (1/6)



第15図 大溝018上面包含層出土遺物 (1/4)

きる。樹種は広葉樹で柁目材である。66加工屑である。残存長7.2cm、残存幅7.6cm、残存厚さ1.4cmをはかる。大型の縦斧もしくは横斧で打ち付けた加工痕が確認できる。下半部には2段の打ち付けた痕跡が見られる。素材形成段階のものである。樹種は針葉樹で柁目材である。67は棒状の加工木である。残存長9.4cm、残存幅2cm、残存径1.8cmをはかる。両面ともに石斧による加工痕を確認できる。68は丸太材である。残存長16.2cm、残存幅5.2cm、残存厚さ5cmをはかる。全体に樹皮が遺存している。下半部に伐採痕が確認でき、石斧による加工と考えられる。樹種は広葉樹で芯持材である。69は分割材である。6分割されたものと思われる。残存長25.9cm、残存幅5.4cm、残存厚さ5.4cmをはかる。下半部に斧による加工痕が確認できる。樹種は広葉樹で柁目材である。70は伐採木である。残存長14.5cm、残存幅13.4cm、残存厚さ9.6cmをはかる。斧による伐採痕、玉切り痕が確認できる。2方向からの打撃によるものと考えられる。またトーン部分には折取痕が確認できる。樹種は針葉樹である。芯持材である。71は矢板もしくは木器素材と考えられる。残存長87.5cm、残存幅13.5cm、残存厚さ5.3cmをはかる。樹種はシイ属と思われる。半裁材である。72は杭材か。樹皮は遺存していない。残存長96.5cm、残存幅6cm、残存厚さ2.8cmをはかる。樹種は広葉樹で8分割された柁目材である。

今回確認できた大溝018は長さ約7.5m、幅約9m、深さ約90cm以上をはかる。溝幅の割に深さが浅いが、上層の包含層など土地改変の影響を考えると、実際はさらに深かったものと推定される。大溝の時期は出土遺物から弥生時代中期後半頃であると考えられる。多くの碎片が出土したことから投げ捨てられたものと考えられる。台地上で集落の存在を確認しており、その集落で使用したものが廃棄された可能性はある。また木製鋤や杓子の把手等の木器類も多く出土した。特に杓子の把手には鉄器での加工痕が見られ、弥生時代中期後半での鉄器の存在を伺わせることができる資料である。他にも

石斧での加工痕もある。今回は紙面の都合上載せられなかったが、石斧や砥石等の石製品も出土している。

## (2) 大溝018上層の包含層

大溝018上層には須恵器・土師器片を多く含んだ層を確認された。第6図1～4層が該当する。遺構検出の際に上面の遺構を確認したが、明確にあったのは遺構021のみであった。包含層の範囲は概ね溝018と同じである。そのため当初は大溝018の一部と考えて調査を行っていたが、トレンチ等の土層観察や出土遺物から別であると考え、また明確な遺構にもならないことから、包含層とした。

**出土遺物(第15図)** 包含層からは須恵器片・土師器片、弥生土器片が出土している。73～75は須恵器の坏蓋である。73はつまみを持たない坏蓋である。口径13.8cm、器高2.2cmをはかる。胎土は精緻で5mm以下の白色粒を含む。焼成は良好で色調は灰色～灰白色をなす。天井部は粗いヘラ切り調整で、他は回転ナデ調整である。74・75はつまみを持つ坏蓋である。74は宝珠形のつまみを持つ。口径14.0cm、器高2.6cm、つまみ径1.9cmをはかる。胎土は精緻で3mm以下の白色粒を含む。焼成は堅緻で色調は灰色をなす。天井部はヘラケズリ調整で、つまみはナデ調整である。他は回転ナデ調整であるが、天井部内面は回転ナデのちナデ調整を施している。75は扁平状のつまみを持つ。天井部にヘラ記号と考えられる痕跡が見られる。口径13.5cm、器高1.6cm、つまみ径2.7cmをはかる。胎土は2mm以下の白色粒を含む。焼成は堅緻で色調は灰白色～灰色をなす。天井部は回転ヘラケズリ調整である。他は回転ナデ調整であるが、天井部内面は所々不定方向のナデ調整を施している。

76～81は須恵器の坏身である。76は底部がやや丸みを帯びている。口縁部がやや外反している。口径12.6cm、器高4.3cm、底径9.2cmをはかる。胎土は3mm以下の白色粒を若干含む。焼成は堅緻で色調は灰色をなす。底部はヘラケズリ調整である。他は回転ナデ調整で中心部分は回転ナデのちナデ調整を施している。77は平底で底部から胴部はほぼ直角に立ち上がっている。口径10.6cm、器高3.5cm、底径7.7cmをはかる。胎土は精緻で1mm以下の黒色粒・白色粒を含む。焼成は堅緻で色調は灰色をなす。底部はヘラ切りのちナデ調整である。他は回転ナデ調整で、中央部分は一定方向のナデ調整を施している。78は口縁部がやや外反している。口径11.6cm、器高3.1cm、底径9.0cmをはかる。胎土は精緻で2mm以下の白色粒・微粒の黒色粒を含む。焼成は堅緻で色調は灰白色をなす。底部は回転ヘラ切りのちナデ消しを行っている。他は回転ナデ調整で中央部分は回転ナデ調整のち不定方向のナデを施している。79は底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。口径14.0cm、器高3.8cm、底径10.5cmをはかる。胎土は精緻で白色黒色微粒子若干含む。焼成は堅緻で色調は灰色をなす。底部は回転ヘラ切りのちナデ調整である。他は回転ナデ調整で、中央部分は一定方向のナデ調整である。80は焼き歪んでいる。口径12.8cm、器高4.1cm、底径8.0cmをはかる。胎土は2mm以下の白色粒・黒色粒を含む。色調は灰色をなす。底部はヘラ切り調整であり、他はナデ調整である。81は底部に粘土紐の痕跡と板状圧痕が見られる。底径10.2cmをはかる。胎土は3mm以下の石英・長石粒・雲母を多く含む。焼成はやや軟質で色調は内面は淡橙色、外面はにぶい黄橙色をなす。内面は摩滅しているがナデ調整が見える。

82～88は須恵器の高台付坏である。82は全体的に焼き歪んでおり、内底に3か所ヒビが入っている。口径13.8cm、器高5.0cm、底径9.0cmをはかる。胎土は5mm以下の白色粒・微粒の黒色粒を含む。焼成は堅緻で色調は灰色をなす。回転ナデ調整である。83は底部から直線的に立ち上がる。口径12.4cm、器高4.5cm、底径9.2cmをはかる。胎土は精緻で2mm以下の白色粒子を少し含む。焼成は堅緻で色調は明灰色をなす。底部はヘラ切り調整である。他は回転ナデ調整で中心部分はナデ調整

である。84は口縁部が外反している。口径12.2cm、器高3.8cm、底径8.2cmをはかる。胎土は精緻で3mm以下の白色粒を含む。焼成は堅緻で色調は黒～灰色をなす。回転ナデ調整である。85は口縁部がやや外反している。口径13.0cm、器高4.5cm、底径8.4cmをはかる。胎土は2mm以下の白色粒・黒色粒を多く含む。焼成は堅緻で色調は灰色をなす。回転ナデ調整である。86は底部から胴部が直線的に立ち上がる。口径12.2cm、器高3.8cm、底径8.8cmをはかる。胎土は精緻で1mm以下の白色粒子、微粒の黒色粒子を含む。焼成は堅緻で色調は灰色をなす。底部はヘラ切りのちナデ調整、他は回転ナデ調整である。87は少し歪んでいる。口径14.4cm、器高5.8cm、底径10.7cmをはかる。胎土は3mm以下の白色粒を多く含む。焼成は堅緻で色調は灰色をなす。回転ナデ調整である。88は底径9.6cmをはかる。胎土は精緻で2mm以下の白色粒を含む。焼成は良好で色調は灰白色をなす。回転ナデ～ナデ調整である。

89・90は須恵器の高台付皿である。89は底径11.2cmをはかる。胎土は精緻で2mm以下の白色粒・雲母・褐色粒を含む。焼成はやや軟質で色調は橙色をなす。器壁表面が摩耗しており不鮮明な所はあるが、底部には糸切りの痕跡が見られ、他はナデ調整である。90は底径16.4cmをはかる。胎土は粗く2mm以下の赤色粒・白色粒・雲母を含む。焼成はやや軟質で色調は橙色をなす。器壁表面が摩滅しており調整は不明である。

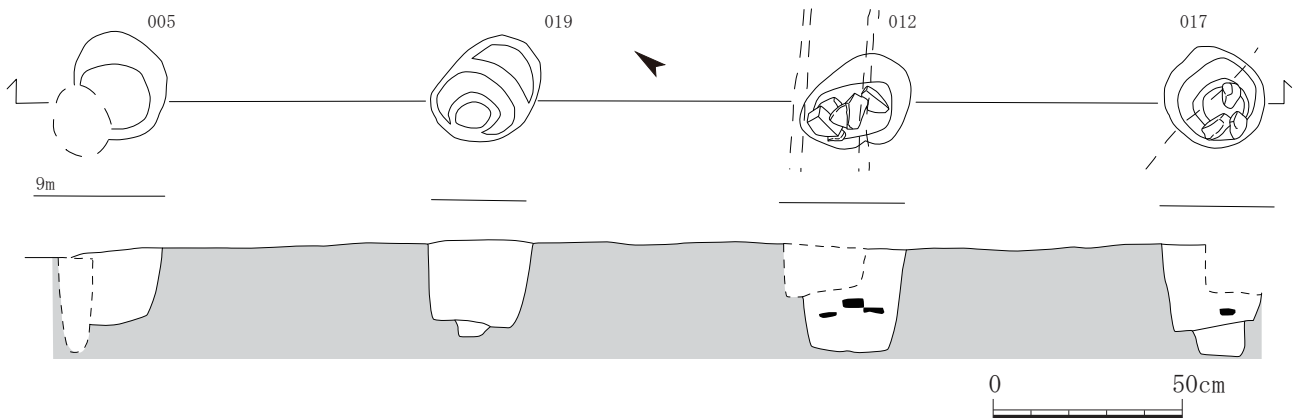
91は土師器の坏身である。口径11.7cm、器高3.3cm、底径8.5cmをはかる。胎土は精緻で1mm以下の白色粒を含む。焼成はやや軟質で色調は橙色をなす。器壁表面の摩耗が激しく調整は不明である。

92はコシキの把手である。最大残存長7.2cm、最大残存幅4.1cm、最大残存厚4.5cmをはかる。胎土は粗く3mm以下の石英・長石粒・雲母を含む。焼成は良好で色調は灰白～浅黄橙色をなす。

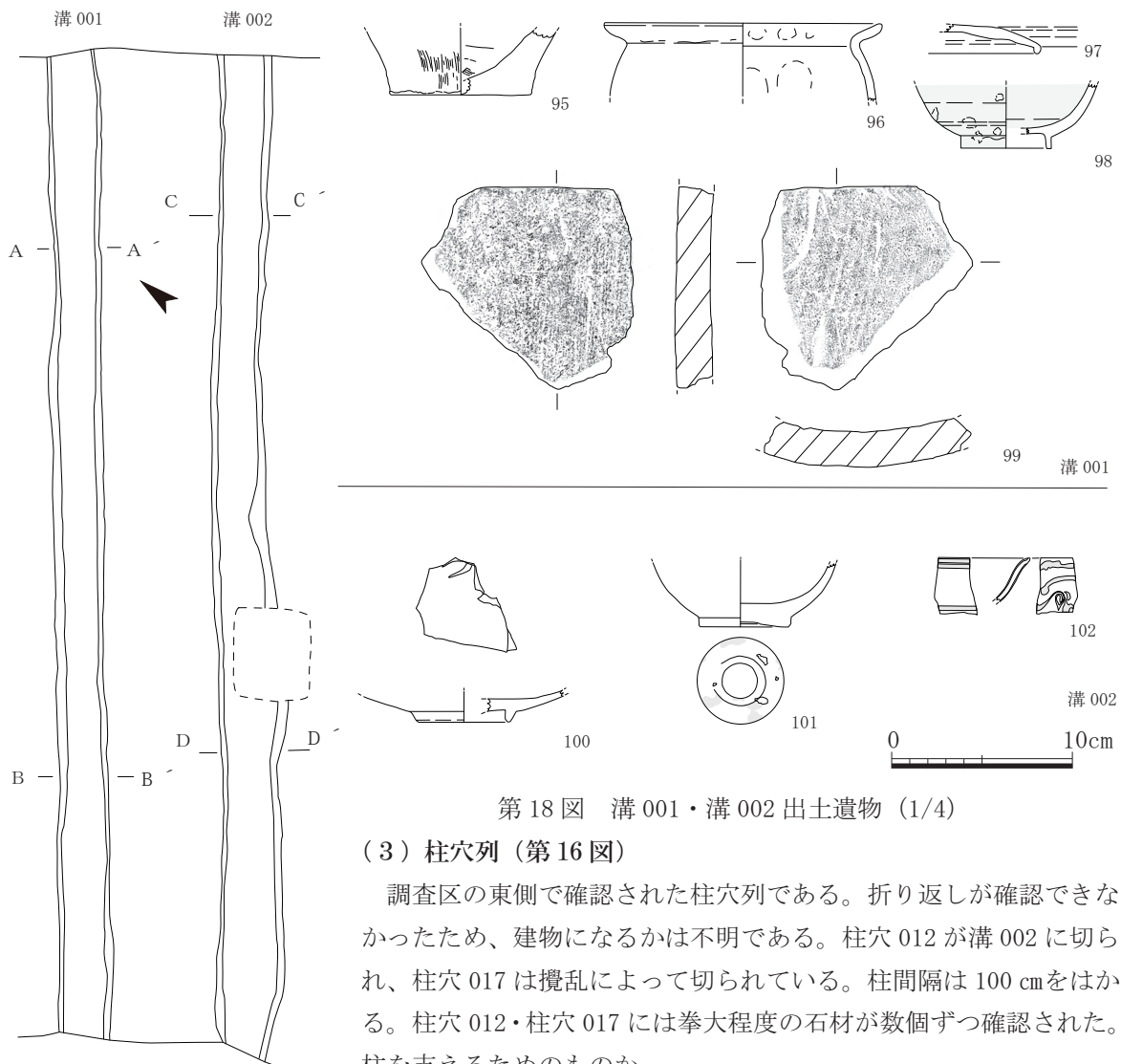
93は弥生土器の蓋である。外面全面は丹塗りされている。つまみ径1.8cm、器高4.9cm、据部径18.0cmをはかる。胎土は精緻で、微粒の雲母を多く含む。焼成は普通で色調は橙色をなす。外面にはタテハケ調整を施している。内面はナデ調整と指押え痕が見られる。

94は弥生土器の高坏の坏部である。脚部が欠損している。口縁部が外反している。口径11.6cmをはかる。胎土は精緻で微粒の白色粒・雲母・2mm以下の赤色粒を含む。焼成はやや軟質で色調は内面が淡橙色、外面が浅黄橙色をなす。全体的に器壁表面が摩滅しており、不鮮明ではあるがナデ調整と考えられる。

出土遺物から包含層の時期は古代（8世紀頃）と考えられる。



第16図 柱穴列実測図（1/20）

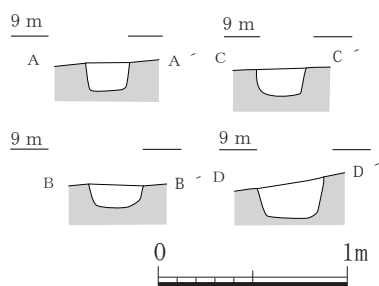


第18図 溝001・溝002出土遺物(1/4)

### (3) 柱穴列(第16図)

調査区の東側で確認された柱穴列である。折り返しが確認できなかったため、建物になるかは不明である。柱穴012が溝002に切られ、柱穴017は攪乱によって切られている。柱間隔は100cmをはかる。柱穴012・柱穴017には拳大程度の石材が数個ずつ確認された。柱を支えるためのものか。

出土遺物は土師器や須恵器等が出土したが、碎片・小片のため図化できていない。



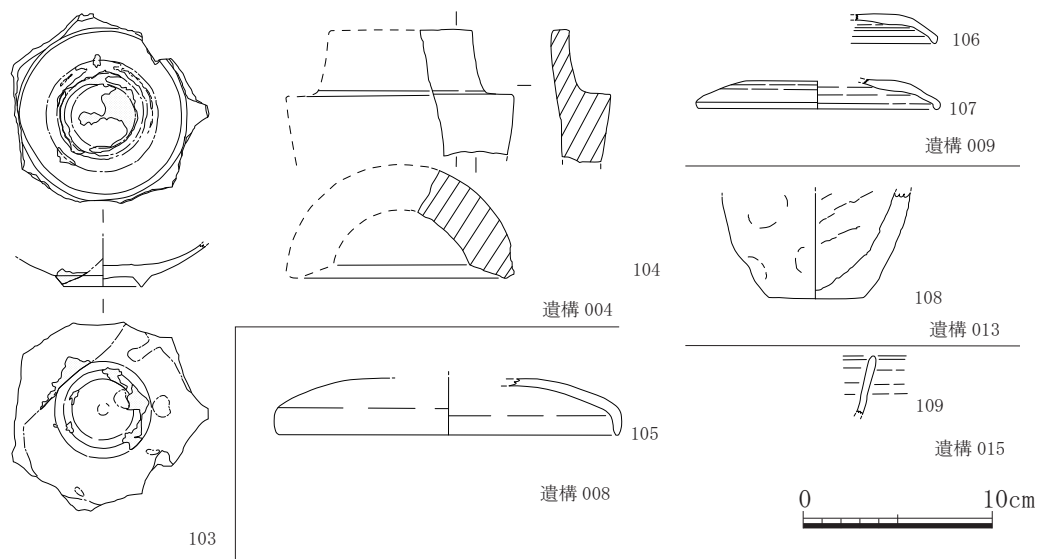
第17図 溝001・溝002実測図  
(1/40)

### (4) 溝001・溝002(第17図)

調査区のおよそ中央に並行して確認された溝2条である。溝001で長さ550cm、幅28cm、深さ16cm、溝002で長さ554cm、幅34cm、深さ20cmをはかる。大溝018は溝001・溝002に、柱穴012は溝002に切られている。埋土は灰褐色粘質土である。

出土遺物(第18図) 溝001・溝002からは弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等が出土している。95～99までは溝001から出土、100～102までは溝002から出土している。95は弥生土器の甕底部である。復元底径7.8cmをはかる。胎土は微粒の白色粒・黒色粒・赤色粒子を含む。焼成は良く、色調は橙色をなす。内面には工具痕と思われる痕跡とハケ目調整が見られる。外面はタテハケ調整を施





第19図 その他遺構出土遺物 (1/4)

している。96は土師器の甕口縁部である。復元口径15.4cmをはかる。胎土は精緻で2mm以下の石英・長石粒・雲母を含む。焼成は良く色調は褐灰～灰黄褐色をなす。胎土は黒色を呈する。器壁表面が摩滅しており外面の調整は不明だが、内面には指押え痕が見られる。97は須恵器の坏蓋である。碎片のため法量は不明である。胎土は精緻で2mm以下の白色粒を含む。焼成は堅緻で色調は灰色をなす。外面から口縁部にかけては回転ナデ調整、内面には不定方向のナデ調整を施している。98は陶器の碗である。底径5.0cmをはかる。胎土は精緻で焼成は堅緻である。色調は胎土がにぶい褐色～にぶい橙色、釉薬は灰白色をなす。また透明底のある白粉をふいた感じの釉が内外面全面にかかっており、ところどころに白い班文のような模様が見られる。畳付のみ露胎している。99は平瓦である。残存最大長11.2cm、残存最大幅11.6cm、厚さ1.9cmをはかる。胎土は粗く5mm大の石英・長石粒を多く含む。焼成は普通で色調は黄灰色をなす。凸面に縄目叩きの痕跡が、凹面には布目痕跡が見られる。100は白磁の高台付皿である。内底に陽刻の花文を印花で描いている。底径5.0cmをはかる。焼成は堅緻である。色調は胎土が灰白～やや浅黄橙色をなし、釉が灰白色で氷裂なく透明感もなく光沢がある。畳付や外底は露胎している。101は高麗青磁と思われる碗である。高台は碁筈底である。底径4.9cmをはかる。胎土は精緻である。色調は釉が剥離してざらつき灰黄色をなし、胎土は灰白色をなす。釉薬はきれぎれで発色も悪く、のびやかではない。氷裂もなく光沢もない。高台底に重ね焼きの目跡の痕跡が見られ、一部赤みを帯びている。102は明青花の鉢である。外面にやや青味を帯びた素地に明るい紺色の発色で文様が描かれている。小片のため法量は不明である。胎土は精緻で、黒色微粒子を含む。焼成は堅緻で色調は胎土が灰～白色をなす。

溝001・溝002の時期としては、出土遺物から中世以降であると考えられる。

#### (5) その他遺構出土遺物 (第19図)

103・104は遺構004から出土した。遺構004は調査区の北隅で確認できた遺構である。平面形は不整形をなす。103は青磁の皿である。見込みは蛇ノ目で釉薬が剥ぎ取られている。周りには青灰色の二重の円弧を描く。蛇ノ目には釉薬を剥ぎ取ったのち、砂目を用いて他器の底を重ねて付着しないようにしている。ただ中間に同じ色調の釉薬が輪状に見られることから、重ねた上の他器の釉薬が流

れ落ちたのだろう。外面は一部高台まで施釉されているが、概ね露胎している。底径 4.2 cm をはかる。胎土は緻密で灰白色をなす。焼成は堅緻で色調は露胎の部分は明黄褐色、釉葉は明緑灰色で氷壁が入り透明感がある。104 は丸瓦である。残存長 1.6 cm、残存幅 4.8 cm、厚さ 2.4 cm をはかる。胎土は 5 mm 以下の石英・長石粒・雲母・褐色粒を含む。焼成はやや軟質で色調は灰白色をなす。表面は摩滅しており、調整は不鮮明ではあるがナデ調整が見られる。105 は遺構 008 から出土した土師器の蓋である。復元口径 18.0 cm をはかる。胎土は精緻だが 6 mm 大の白色粒が 1 個みられる。焼成はやや軟質で色調は橙色をなす。器壁表面が摩滅しており調整は不鮮明であるが、一部ナデ調整が見られる。106・107 は遺構 009 から出土した須恵器の坏蓋である。106 は碎片のため法量は不明である。胎土は精緻で白色・黒色微粒子を若干含む。焼成は堅緻で色調は灰白色をなす。天井部が回転ケズリ調整で、他は回転ナデ調整を施している。107 は復元口径 12.6 cm をはかる。胎土は精緻で 2 mm 以下の白色粒を若干含む。焼成は堅緻で色調は灰色をなす。調整は概ねナデ調整であるが、内面にはナデ調整ののち不定方向のナデを施している。108 は遺構 013 から出土した弥生土器の鉢である。復元底径 5.0 cm をはかる。胎土は粗く 5 mm 以下の石英・長石粒・雲母・橙色粒子を含む。焼成は良く色調は淡黄橙色をなす。器壁表面が摩滅・剥離しており、調整は不明であるが、外面に指押え痕が見られる。109 は遺構 015 から出土した須恵器の坏身である。小片のため法量は不明である。胎土は精緻で白色・黒色微粒子を含み、1 mm 大の白色粒もみられる。焼成は堅緻で色調は灰白色をなす。回転ナデ調整である。

その他図化できていないが、遺構 021 から土鈴が 1 点出土している。

### 第 3 章 まとめ

今回の調査地点での検出遺構は、大溝 1 条、柱穴列、溝 2 条、他柱穴・ピットである。また大溝 018 上層には古代の包含層を確認した。検出遺構の時期も大溝が弥生時代中期後半頃、溝 2 条が中世以降と考えられる。

大溝 018 はその規模から板付遺跡が立地している台地の 1 つの南台地を巡る外環濠の可能性が考えられる。周辺の調査成果を見ても、南西側での 56 次調査で弥生時代中期後半～後期初頭前後の溝を確認しており、今回の大溝との関連性が伺える。ただ今回も 56 次調査も調査範囲の端で確認しており、溝の片側のみしか確認できていない。そのため溝の全容を把握できていないため、外環濠とするには周辺の調査事例の増加を待って判断したい。

大溝 018 からは木器や木材片が出土した。その中で杓子の把手（第 13 図 59）に鉄器での加工痕が確認できた。側面を鉋等で成形したものと考えられる。これまでの調査で鉄器はほぼ出土しておらず、板付遺跡での鉄器使用に関して不明な点が多かったが、木器から鉄器使用を考える上で貴重な資料となるであろう。

大溝 018 上層で確認できた包含層であるが、56 次調査で古墳時代から奈良時代の建物群と 8 世紀末前後の官道と建物群が見つかり、それに関連するものとする。官道そのものは確認できなかったが、おそらく調査範囲の南西側の未調査部分に官道がある可能性がある。

最後に本調査地点では、弥生時代から中世まで幅広い時期のものが確認できた。特に大溝 018 から出土した弥生土器は非常に多くすべてを図化・報告することができなかった。すべては報告者の力量不足である。ご寛容頂きたい。ただ大溝 018 出土の弥生土器、木器類が、これまでの「板付」地域の歴史を再考する十分な資料である。これからの研究の一助になれば幸いである。



1. 調査区全景（西から）



2. 大溝 018 木器出土状況（南西から）



1. 調査区東壁土層（北西から）



2. 調査区南壁土層（北東から）



3. 柱穴 012 石材検出状況（東から）



4. 柱穴 017 石材検出状況（北から）



5. 大溝 018 全景（南東から）



6. 溝 001・溝 002 全景（北東から）



1. 弥生土器甕 (第8图4)



2. 弥生土器甕 (第9图10)



3. 弥生土器甕 (第9图11)



4. 弥生土器甕 (第10图26)



5. 弥生土器無頸壺 (第11图31)



6. 樽型土器 (第11图39)



7. 弥生土器蓋 (第11图41)



8. 弥生土器器台 (第12图46)



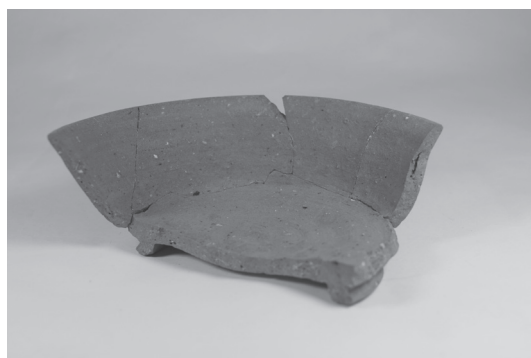
1. 弥生土器小鉢 (第 12 図 50)



2. 須恵器坏蓋 (第 15 図 73)



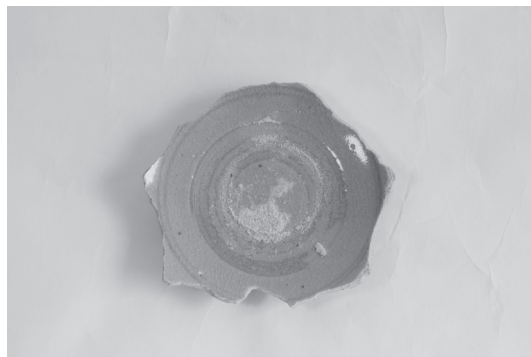
3. 須恵器坏身 (第 15 図 79)



4. 須恵器高台付坏 (第 15 図 85)



5. 平瓦 (第 18 図 99)



6. 青磁皿 (第 19 図 103)



7. 木製鋤 (第 13 図 60)

報告書抄録								
ふりがな	いたづけ 13							
書名	板付 13							
副書名	—板付遺跡第 77 次調査報告—							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 1497 集							
編著者名	山本晃平							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒 810-8621 福岡県福岡市中央区天神 1 丁目 8 番 1 号 TEL 092-711-4667							
発行年月日	2024 年 3 月 22 日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				(㎡)	
いたづけいせき 板付遺跡	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 はかたぐいたづけ 博多区板付 5 丁目 7-115	40137	94	33° 33′ 45″	130° 27′ 11″	20220523 ~ 20220624	99.9	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
板付遺跡 第 77 次調査	集落	弥生時代中期～近世		溝・柱穴列		弥生土器、須恵器、 土師器、陶磁器、木 器		弥生時代中期から近世に かけての集落跡
要約	<p>今回の調査地点は板付遺跡の南西側に位置し、遺跡が立地している 1 つの南台地の西側端に位置する。検出遺構は大溝 1 条、溝 2 条、柱穴列、その他柱穴・ピットである。大溝からは多量の弥生土器片、鋤などの木器類、石斧などの石製品が出土しており、遺物の出土状況から打ち捨てられたものと考えられる。また木器には鉄器使用の痕跡が認められる。時期は弥生時代中期後半頃である。また大溝上層には古代の包含層があり、すぐそばを通るとされる官道と時期が近いことから、その関連のものとする。</p> <p>溝 2 条は並行している浅い溝である。出土遺物から中世以降と考えられる。</p> <p>大溝は台地を巡る外環濠の可能性もあり、板付遺跡の集落構成を考える上で重要な知見を得られた。</p>							

## 板付 13

—板付遺跡第 77 次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1493 集

2024 (令和 6) 年 3 月 22 日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神 1 丁目 8 番 1 号

TEL (092) 711-4667

印刷 株式会社陽文社

福岡市博多区那珂 5 丁目 7 番 37 号

TEL (092) 412-7331

